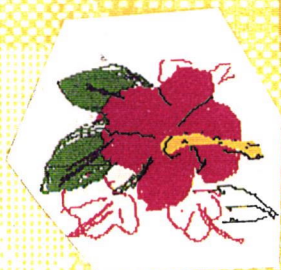


我が心の堅琴
八十路編



我が心の堅琴

八十路編



でも平凡な日常ながら、感じたこと、見聞きしたことを少しでも残して読んで戴けたら、私の生きて来た意味合いが少しは出てくるのではないかと、喜寿編を終えた後書き留めた随筆らしきものをこの歳を区切りにまとめて見ました。文章等ろくに書いた事のない私ですが、70才の時にまとめた『我が心の豎琴』第一遍より12、3年、今まで何とか書き続けられたのは、そのころ出始めたワープロに興味を持たたからに外ならないと思われる。現在3台目を使っているが、2年程前から我が家にも登場したパソコンより使い慣れたせいとか、まだ手放せないで使用している。ワープロはもうメーカーは製造中止で、ワープロの寿命が先か、私の寿命が先かの瀬戸際なのかも知れないと自覚している。それで使用してなかったワープロの能力を充分發揮させる事も、私の感謝の気持ちを表すものと、恥じを忍んで、今度の表紙はワープロでお絵書きをして残そうと思い立った。表紙の桜・ブーゲンビリア・そして裏面の文章を表す一端の画をワープロの手書絵で書いて見た。(絵など書くのは、小学校以来初めてかも知れない)

まえがき

日本人の平均寿命80・9才、介護など要しない年齢である平均健康寿命は74・5才、正にこの数字は、オーストラリア・フランスを抜いて世界一の長寿国となった事を意味している。

私が生まれた頃は、人生50年と言われていた。今年（平成16年）5月で私は満80才の大病に乗ろうとしている。数字的には平均寿命まであと0・9年、まことにわずかの平均余年数ではあるが、自分では何か他人事のような気がしてならないのは、どうゆう訳なのだろうか？ 病気に鍛えられ、死を恐れなかった戦争に鍛えられ、敗戦の食料難に鍛えられた為、精神的に鈍感にさせられた為かも知れない。或いは2年程前まで会社で働かせて貰っていたので、自分の歳に対する感覚が麻痺しているのかも知れない。でも戸籍簿を見ればやっぱり満80才である。息子2人娘1人の親であり、孫も8人になっている。数字的にはまだボケずにはっきりと自覚しているのだが、感覚的にはちょっと納得がイマイチである。

私の年齢から見て、この本も誰かに「遺稿集かい」と言われそうなものかも知れないし、またそうなるのかも知れないが、私はまだまだ強きで生きて行きたいと思っている。先日血管の相当年齢を調べて貰ったら、55歳と出て全く意を強くしたものだ。私の母が生きた満百歳までワープロをもう1、2台中古屋で探し続けて、書き続けたいものと願っている。

非常に強気な、また無礼な『まえがき書き』となった事をお詫びして筆をおきます。

平成16年5月16日

いかに生きるか、何のために生きているのか。

自分自身をじっくり見つめ、

この一瞬一瞬をひたむきに生きてこそ、

真に人生と呼ぶにふさわしいものになります。

How and for what reasons do you live?

Observe yourself and live every moment with total effort.

Then you will truly live your life to the fullest.

目次

65年目の同窓会	1	頁
富士山と私	9	
鈍	1	
ともしび	2	
忘却	2	
友達	3	
電波時計に寄せて	3	
時の流れに身をまかせ	3	
華麗（加齢）なる思い	4	
自動車秘話あれこれ	5	
一言挨拶の効能	7	
目覚め	8	

歩み

80歳代の悟り

枯れ葉

病みし姉を覚えて

夢

ミイラ捕り

87

89

97

99

101

115

六十五年目の同窓会

十五名の同士銀座に現る。赤穂浪士の討ち入りではないが、大正末期に生を受け、世相に流され戦った面々である。物故者十七名・現況不明者十八名・現況判明生存者三十六名の中の十五名である。勢揃いの面々は昭和十二年（西暦一九三七年）東京、青南小学校男子クラス薄井学級卒業のクラスメイトである。かく言う私も、この集まりの十日位前まで、物故者ならぬ現況不明者の中の一員であった。それもその筈、私が二十才の時の徴兵検査の時に、二、三名の学友に会ったきりで、それ以来小学校の友達とは、誰とも会ったことがないのである。

大東亜戦争勃発、そして敗戦が濃厚となった昭和二十年の五月始めに、単身東京を離れて、当時の静岡県富士郡吉原町で、飛行機のエンジンを作っていた軍需工場に就職以来、富士の人間になってしまった私である。

私たちの母校青南小学校の通学区は、赴任直後の五月二十五日、東京青山の大空襲で小学校はもとより、全てが廃塵に帰したのであり、学友の殆どが罹災

したのである。

その時のリアルな状況を表現した、青南小学校四年後輩の卒業生が書いた、

【青山炎上】の書物の一部をお借りすると、

【みんなが十六、十七歳だったあの日、青南が燃えた日、表参道交差点がどんな悲惨な、おぞましい場所になったかは、たくさんの人が見て知った。立ち木の根元にも、二基の石灯籠の回りにも、左角の安田銀行の鉄扉前にも、うず高く二階まで達する焼死体の山、山。……吹き上げられた様に積み上げられて死んでいた人々。その「山」を、泣きながら崩して、父を、母を、兄弟を探して声を限りに叫ぶ人々。あの光景は思い出したく無い。…

それでも、書かなければならない。後の世代に語り継ぐためには】…と。
累々と並んだ死体の写真を表紙にして書かれている。明治神宮表参道は、小学校のすぐそばであった。

軍隊に取られたり、罹災して散り散りになったクラスメイト達、その惨状を伝え聞いた私には、友と連絡する術等は考えられなかった。『城所さん、青南小学校薄井学級卒の木下です。六月二十日銀座でクラス会を開くので、ご出席

なさいませんか？」と突然電話が入って来た。

「えっ、青南のクラス会！」私には正に耳を疑う驚きの電話であった。

『実は、クラスメイトの蔭山順チャンから、城所さんと時々電話していると聞いて、住所を伺いお誘いしました』とのこと、確かに医師である蔭山順一君とは、不思議な縁で電話番号を知り、共に通った小学校唯一人の親友として、時々電話等をして、小学校時代を思い出し、旧交を暖めていたのである。

私にはまさかクラス会をもっていた等とは、夢々思えぬことであった。

聞くところに寄ると、クラス会は毎年持っていて、もう二十九回を数えているとのこと、早速参加の返事を投函したが、六月二十日木曜日を忘れてはいけな
いと、カレンダーに書き込むと同時に、案内状を二、三回開けたり、閉じたりして確認し、六十五年振りの再開を楽しみにしていたのである。

同窓会当日六月二十日が来た。首都圏を離れて半世紀以上、東京の銀座と言えども不案内である。銀座七丁目の同窓会会場に行くのが、なんとなく不安なのである。

山手線の新橋で降りるか、有楽町で降りるか迷ったが、幹事の木下君から送

られて来た地図を見ると、曲がり角に日産と言う字が出ている、私が定年まで努めた会社名である。なんとなくそれに引かれて有楽町で降りてみた。定刻二十五分前である。多少降り始めた小雨に、大股にて地図を片手に会場に向かう。銀座はやっぱり銀座で、小雨にめげず大勢の人々の行き交う街であった。電信柱に書かれた銀座何丁目の看板を見ながらの、銀ぶらならぬ会場探しである。やっと探し当てたビルに、定刻二、三分前に着くことができた。中から幹事の木下君が飛び出して迎えてくれた。でも私には全然見覚えのない顔である。入り口には青南薄井学級同窓会会場と書いてある。間違いの無いクラス会会場である。部屋に入ると、ほとんどの席は埋まっていたが、一通り連中を見回しても、見覚えのある顔には出喰わされ無い。私は十三才で別れ、その五倍もの人生を隔たっていた友達、風貌は当然大きく変化している分けである。

でも木下君から、予め知らされていたのか、《やあ！城所君》と皆で歓迎の言葉を吐いてくれた。その一言で顔は分からなかったが、クラスの皆なのだと、心の中に懐かしさが、ふつふつと込み上げて来た。

六十五年、一言で言えば簡単な事であるが、我々の歩んだ其の道は本当に陰

しかった。

昭和十二年七夕の日に起きた中国の蘆溝橋事件、十四年のノモンハン事件、十六年のハワイ真珠湾攻撃、ミッドウェー海戦、サイパン・グアム島の玉砕、東京大空襲、原爆投下、そして二十年の敗戦、戦後の超インフレ、食料難等々、我々の青春の真っ只中は、戦いの渦であり、そして困難な復興の時であった。

でもこうして小学校のクラスメイトに再開できる。顔は思い出せなくても、面と向かって座って見ると、今は亡き担任の薄井先生の大柄な体と、竹の棒を持ちながら授業をしていた、その風貌が心の中に蘇って来た。

音楽の時間に、皆が騒いで泣かしてしまった女の大友先生。学校の講堂で、悪が負けて正義が勝ち、皆で拍手すると言うストーリーしか無かった月一度の映画会。鉄筋一部四階建、理科室、音楽室、裁縫室、保健室等、その頃東洋一を誇った新校舎。屋上から代々木の森の緑がよく見えた遊び場。真っ白い手袋で、校長が厳かに取り出す天皇陛下の御真影。それらの思い出が、走馬灯の様に、面と向かった友達の顔と重なって、心の中に蘇って来た。しかしこの度のクラス会の案内状と共に、送られて来たクラスメイトの住所を見ると、青南小学

校の通学区域に住んでいる者は、たった一人見当たるばかりで、その外の人達は区域外に現在住んでおり、毎日繰り返される空襲、焼夷弾等による壊滅的破壊が、より酷く友達の上に襲いかかって、散り散りにされていたのである。

小学校卒業後の皆の進路も、それぞれが置かれた環境に、大きく左右されたものであろうし、登校時によく誘った、戦時中の駐伊大使の息子白鳥君も、既に亡くなっていた。彼のお父さんは、敗勢によりA級戦犯となり、どんな悲惨な思いが彼の上に降りかかって来たか、友として、彼の人生の歩みを知り、慰め得なかったことを恥ずる想いであった。取り戻すことが出来ぬ六十五年の歳月を、じっと、噛み締める一時でもあった。！…

でも面と向かった十五名の友から出る言葉は、恩師の話題であり、現在の立場は各々違っていても、昔の如く懸け隔てのない、友としての顔と、心を見せられていた。

全員の経歴は分かる由もないが、今日の主賓の石原君の隣に、私の席が取ってあった。彼は今年四月に勲三等瑞宝章を受けたのである。席順は無いとは言え新参者の私が彼の隣とは、いささか面映い気持ちで席に着いた。彼の家と

は百m位隔てた所にわが家があったので、時々遊びに行かせてもらつた仲である。そして今日は、彼の受賞を皆で喜び合おうと言う会でもあった。

東京女子医大名誉教授の肩書をもつ彼から、近況等話す事になった。彼は

『私立の学校畑を歩んだ自分に、なぜこの様な賞を戴いたか分からなく、もつと先輩の方々がいるのに申し訳ない気持ちだ』と非常に謙虚な言葉で挨拶をし、感銘を与えてくれていた。

次は隣の席の私である。現況不明者であつた私が、六十五年振りにこの席に現れたいきさつと、一人一人の面影を思い出すべく努力しても、現代板浦島太郎は、すぐには思い出せないが、この会に出席出来て、友達である感覚を確かなものに出来た喜びを披露した。

奥さんの料理に手を出したら、面白くなつてたまらず、料理に励んでいる中村君とか、肝硬変のため体を縦横十文字に手術されて、九死に一生を得たと披露する友達。また一匹の幻の蝶を求めて外国の山に昇り、或る時崖から転落したが、うまく回転して転がり、岩にぶつかって止まったが、「転がる石には苦むさず」の諺とは逆に、止めてくれた岩には十cm位の厚い土と苔が着いており、

クッションとなって助かり、奥さんに助け起こされたと。威張った成功談を披露せず、失敗談に花を咲かせた幸運児、蝶の理学博士の五十嵐君。「そういえば君は小学校の時から、回転が巧かったな」と六十五年も前の思い出を語り、口を合わせる友。そこには打算も、へつらえも無い友としての、心の交流で満ちていた。

それら多事歳々の近況報告であつたが、喜寿の祝いも過ぎ去つた面々、肉体的な衰えを訴える友も多く居る中で、パーキンソン病のため茨城県日立市から、奥さんの送り迎えを得て出席された友もあり、また兵役等で大陸に渡り、大変苦労した友もいるはずであるが、愚痴らしいものは一言も聞かれず、老いを寛容しつつ、前向きに生きようとしている、多くのクラスメイト達！卒業証書、卒業写真集を焼き、思い出の物件のほとんどを失った我々であるが、友の絆と言うか、男同士の心の結び付き、そして思い出の心を大事に生きる友が、今もこんなに居たとは、驚きであり、そして喜び、慰められた一時であつた。一期一会の言葉の実感が頭を横切つていた。まさに、六十五年目の同窓会万歳である。そして、来年私は一年目の同窓会である。

富士山と私

四人掛け座席の東海道本線は、白煙を勇ましく吐く男性的な蒸気機関車に引張られながら京都から東京に向かい、吉原当たりの線路を走っていた。もう七十三年前の昭和五年の話である。

京都で中耳炎を患っていた私は、汽車の座席の下に一貫目の氷を忍ばせて、母が打ち割ってくれる氷のぶっかきで、耳を冷やししながら、車窓から見える夕方の富士山を眺めていた。

初冠雪を戴いた、富士山に写る茜色の夕焼けの美しさ、五歳の私の脳裏にも、焼き付いて離れない存在となっていた。

後に書物で眺めた、江戸時代の浮世絵師、葛飾北斎の描く『赤富士』よりも、もっと美しく、私の心の中に残っていた。

しかしながら生まれ故郷東京で育った私は、その後富士山を間近で見る機会は無く、その時の事は脳裏から失いかけていた。

昭和二十年五月、縁あって私は富士山から真南の、静岡県富士郡吉原町にあった軍需工場に就職していた。

足の悪かった私に、

「丙種合格とする。銃後に有って、確りお国の為に励んでくれ。」と言う、老いた徴兵検査官の言葉を心の中に刻んで、私は飛行機のエンジンを製作しているN社を選んだのである。工場の片隅には、プロペラを付けたエンジンテスト機が、物凄い騒音と、作り出す風圧は、人を近付けまいとしている強さで迫っていた。

ほとんど休日の無い戦時下で、私は昼間の富士山を眺めた記憶は残っていない。それよりも灯火管制の下、真っ暗になった町の北方に聳える、黒い大きな固まりと化した富士山、それを目印として押し寄せる米国のB29爆撃機、数え切れない数をもって、吉原の上空を通り、富士山から東京方面に向きを変えて、爆撃に向かっていている姿を、毎日のように見せつけられていた。

私が生まれ育ち、また父母兄弟が居る東京である。あの家を、あの学校を、焼き尽くしに向かう、悪魔の群れである。

幼さき時知った、あの美しい富士山は、悪魔の道しるべと変わっていたのである。人間であれば、重大な利敵行為として、銃殺刑の極刑にされても、仕方がない存在と化していたのだった。

高さ三七七六米、周囲に自然の美しい五大湖を控える秀麗富士山の姿は変わらないのに、私の心には、人間の醜い争いの為に、あの偉大な富士山さえ、女神になったり、又、悪魔になったりする事を悟らざるを得ない時であった。：

◇

◇

さて、時が経ち、平和が戻り、夜のあの巨大なシルエットの富士山にも、山小屋の灯火が点々と輝きを見せていた。

あの灯火の下には、登山者の安らかな寝息があり、明日への希望の夢を託しているのかと思うと、我々人間の醜い争いをも飲み込む、自然の安らぎと偉大さと、そして我々を、大きく包容してくれる富士山だと、平和は私に悟る気持ちを戻してくれていた。

その、戦後の落ち着きを取り戻して来た時に、N社のハイキング部のリーダーから富士登山の誘いがあった。五合目までの自動車道も開通し、登山には慣れない私たちにも、登れる時代になって来たのである。

会社務めを終わっての登山である。二人がやっとすれ違える位の登山道である。片側は見上げる山の斜面であり、片側は転がれば、下まで一気に転がり落ちそうな眼下の急斜面である。登山シーズンで道は人又人の行列であった。各

人がもつ懷中電灯が一行の線となつて、曲がりくねった登山道の道しるべとなつて、一步一步登っていた。私も一人前に金剛杖をついての登山であつたが、そう苦しくも無く、とつぷりと暮れた八合目の山小屋に着いていた。

氣が合つた者同士の山小屋は楽しい一時である。疲れも忘れて話し合う仲間は、汗で汚れた顔に白い齒が、目立ち過ぎる位の笑を見せていた。ご来光を拝むには早く出発しなければならぬと、語りたい氣持ちを押さえて眠りに着いたのだが、翌日は雨模様様の荒れた朝になってしまつていた。

でも八合目から頂上まで、手に取る様な距離である。

「ここまで来て登らないとは」という氣持ちが、皆の心の中にあつたと思うが、リーダーの決断は下山の一言であつた。胸突き八丁の急斜面とか、突風にさらされる曲がり箇所とか、皆の逸る心は知りながらも、経験豊富なリーダーの決断であつた。

御殿場の砂走り口に、靴を半ば砂に埋めながらも無事に下山出来た。それ以来私は、富士登山に挑戦した事はなかったのである。七十も半ば以上を過ぎてしまった私には、あの頂上は幻の地になる公算が、多大になりかけているのである。

さて私は、富士市から沼津まで延々二十三日に及ぶ田子の浦砂丘の中に住んでいる。

砂丘の海側にはコンクリートで出来た堤防が、これまた見渡す限り延々と伸びている。私は天から与えられた散歩道として、時々歩いているのである。東に歩けば左に、西に歩けば右に、霊峰富士が、時には雲と言う羽衣を纏い、又麓までの美しい曲線を惜し気もなく見せて、私を迎えて入れてくれている。

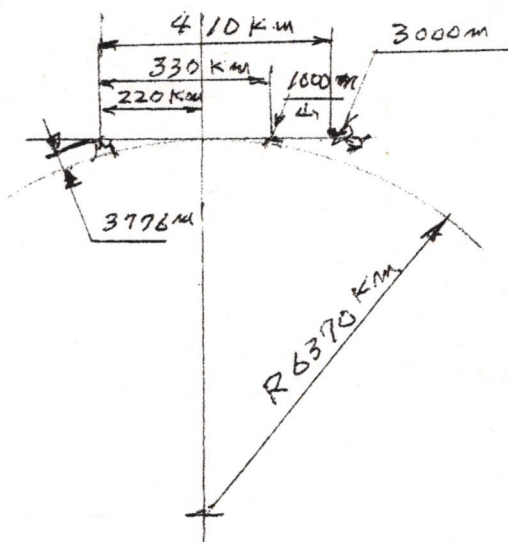
そして心の余裕が与えられた為か、今まで気ずかにいた富士の千変万化の姿に、しばし見とれる一時を与えられているのである。

万葉集に載っている、山部の赤人の、

『田子の浦打ち出で見れば白妙の、富士の高嶺に雪は降りつつ』と歌わしめた天下一品の風景を、一人占めして歩いているのである。

すぐ足元に打ち寄せる駿河湾の白い波頭と、裾野から頂上まで一望の、秀麗富士山を眺めながらの散歩道は、正に贅沢の極みである。眼を落とせば月見草の花が一面に薄いピンクの群れとなって咲き、犬と戯れる子供達が大声で叫び走り抜けて行く。そしてあの平和の富士山は、私の心と健康を支えてくれている。

のである。



富士山の麓に生活して早五十八年、毎日富士山の美しさの恩恵を受けている日々であるが、時々東京当りから、雪を被った富士山を見たと言う連絡を受ける。たまに見える富士山の姿は、また我々と異なった喜びとなって接する人々を喜ばしてくれている。どの辺の土地まで富士山が見える可能性があるある事かと考えたら、割に簡単な計算で算出出来る事が解った。

中学校で習う三平方の定理（ピタゴラスの定理）で簡単に解けるものであった。右の図の如く、地球の半径を六三七〇Kmとし、富士山の高さを三七七六mとすると、地上で見える範囲は、途中に山などが無いとして、富士山を中心にし

て二二〇Kmの範囲であり、名古屋付近が限界となっている。又一〇〇〇mの山に登って見ると、三三〇Km離れていても見える計算となる。さらに上空の三〇〇〇mを飛行している飛行機上で見ると、四一〇Kmの遠隔を飛んでいる所から見える計算となり、大阪上空の飛行機から眺められる事となる。但し双眼鏡等で見ても小さな富士山であるかも知れない。



最近NHKの総合テレビで「富士山私の一枚」と題して、秀麗富士山を撮った写真を、毎日の様に放映し、千変万化の雲を纏った姿やら、茜色の美しい山肌等、私の知らない富士山を紹介してくれている。また富士山の見える教会での結婚式に、記念写真として富士山をバックに、新郎新婦を撮っている牧師を紹介していたが、実に富士山の美しさは、万人に好かれる美しさであり、心とませる存在となっている。七十三年前に見た美しい姿を、蘇へらせてくれた。

あの、千変万化の偉大な富士山は、毎日見慣れ、マンネリ化する私の心を戒め、大きな示唆を与えてくれている偉大な絵巻物として、私の為に存在している様に思えて来た。

そして、どっしりと落ち着き、構えている富士山が、小さな私の心を広く包容してくれて、つまらない事に一喜一憂する私を、鍛え直してくれていた。

…富士山は、やっぱり私に、なくてはならない存在であった。…

鈍

【皇国の荒廃この一戦にあり。各員一層奮励努力せよ】との、時の首相東条英機の張りのある声が、ラジオから流れてきた。当時の我々日本国民は胸躍らされ、戦地に赴いたものである。大正生まれの私の脳裏の一端に、人を引き付けるあの雄弁が60年たった今も、かすかに蘇えって来るのである。

陸軍士官学校卒業という、当時としては東大と並んであこがれの学校卒業生である。いわゆる『頭の切れた』人間である。

でも、ミッドウェー海戦で日本空母4隻を失って戦局が逆転し、ガダルカナル、アッツ島の玉砕の事態に、一部新聞が報じた〔竹槍では間に合わぬ、飛行機だ〕の記事に激怒した人物である。さらに文献によると、ラバウル地区では死者13万人・船艦艇185隻・飛行機8000機を失ったと記述されている。その後マリアナ沖海戦で、日本の戦闘能力を殆ど失っても、首相という地位にないながら、終戦の決意が出来なかった人物である。そして原子爆弾その他により、多くの国民が更に犠牲になったのである。

戦争を閉じるといふ大決意、それは『頭のきれた』能力でなく、身命を投げだし得る太っ腹の、どちらかと言えば『鈍』なる人物では無いかと私は思う。

あまり知られてないが、敵の戦艦ミズリー号上の降伏調印式の席上、正副の調印文書交換の席で、重光外務大臣に随行した加瀬俊一さんが、調印文書の国と署名者の欄がずれているの発見し、係官に指摘すると「降伏に來た国が何事とぞ」とばかり訂正を拒否されたが、『この様な間違つたものは受け取れぬ』とやり取りの末、『どうしても訂正を拒むなら、受け取って帰るが後世に（マッカーサーは間違つたものを受け取らせた）となつても良いか』と詰め寄つて訂正に応ぜさせたとの事である。戦勝国の並み居る軍人の中で、誤りを堂々と主張出来る者、それは『頭のきれた』と言うより、太っ腹のどちらかと言えば『鈍』なる人物ではなからうか。

また古くは薩摩藩の下級武士出身の西郷隆盛は、『鈍』と言われながらも江戸城の無血解放を成し遂げ、明治維新を成功させ封建社会から国民を救つた人物である。迅速に物事を処理できる『頭の切れた』人間と、ゆわゆる『鈍』と言われる、どことなく物事を速やかに処理できない人間との違いは何か？私の心に最近何となく興味をそそる問題として登場して來た課題ではある。

『鈍とは』字引を引くと、『にぶいこと』『利口でないこと』と出て来た。思っていたより、峻烈な言葉である。『にぶいこと』は何となく私の感覚と合っている様な気がする。

でも『利口でないこと』とは、私の感覚とは些か離れ過ぎている表現である。あまりすっきりしないので、さらに別の字引を引くと『すばやくないこと』とも出ていた。続いて熟語として鈍器、鈍才、鈍夫、鈍兵、と出て来た。鈍妻、と言う字がないのは、やはり男の方が鈍に近いのかも知れない。よくおしゃべりする人は、確かに鈍とは見なされないのかも知れないと、心密かに思った次第である。先の東条首相しかりである。

彼が軍服を着て雄弁なる演説をすると、ついその気になり、いつの間にか心奪われてしまうのである。

『鈍』と呼ばれる人は、人を引き付けるに時間がかかるものである。でも人間的にどちらが優れているか、劣っているか、と言うことには何も関係ない事と思っている。社会に貢献するに、そのことで優劣は付け難いものと感じている。

我々がよく図面を書く時に、2つの線で交わるコーナーを鋭角で書いたり、

鈍角で書いたりする。交わった角度が90度以下を鋭角、90度以上180度以下が鈍角として扱っている。勿論それぞれ必要性から決まってくるものである。

確かに鋭角はとがって鋭いが、何かぶつけると折れてしまいそうだ。鈍角は鋭さはないが、円に近付いていて安定感があるものである。

鋭か、鈍か、その善し悪しを云々する積もりは毛頭無い。それぞれが特徴を發揮し、時宜に得た行いとなれば良いのである。

ただ私は、一般的に世の中の評価が鋭に傾き過ぎて、鈍に辛過ぎる傾向が感ぜられてならない。確かに『利口でないこと』より『利口である』方が良いに決まっているが、私には『利口』の定義が問題である様に思えるのである。

『利口とは』又々字引を紐解くと『賢いこと』『頭脳が良いこと』と出て来た。言い換えると結局『鈍とは』『賢くないこと』『頭が良くないこと』となってしまうている。『賢くないこと』『頭が良くないこと』とはどうゆう現象なのであろうか？

世間一般の常識で言うと、『もの覚えが悪い』事とか『物事を素早く判断できない事』等を言っている様にも思える。

その証拠にその人の一生を左右しかねない、学校入試のペーパーテストである。質問を出して、ある短時間に回答を出させる。そして点数を取り合否を判定する。交通事故に対する反応テストならいざ知らず、それで本当にこれから学問を生かす人物と、生かせない人物をより分けられるものか、大いに疑問が有るのである。大いなる真理を解き明かすのは、じっくりと考える者によって明かされる事が、多いのではないだろうか。

近代物理学の基礎を切り開いたニュートン。彼は単にリンゴの落ちる瞬間を見て、万有引力を発見したのではないのである。それはヒントにはなったのかも知れないが、考えに考えて万有引力を導き出したのである。相対性理論を世に出したアインシュタイン、また然りである。

「人間は一本の葦にすぎない。自然のうちに最も弱いものである。」

だがそれは、考える葦である。――

とフランスの天才学者パスカルをして言わしめている。

終戦後我々日本人は、資源の無い日本で我武者羅に働き、絶対値下がりはないと言う神話を作って土地を買いあさり、果ては外国のビルまで買いあさって、日本が世界を買い取ってしまうのではないか、とまで言われた所謂バブル

最盛期を作ってしまったのだ。

その時一番金を持っていた銀行や、投機にはやる不動産屋が、自己の利益一辺倒に走り、その結果多量の不良資産を持て余し、今日の不景気の元凶となり、そのあげくの果てに今日の弱者切り捨てのリストラとなって、現れて来たのである。

まさに考えの無い日本経済の舵取と言えるのである。

『鈍』で良い。長に立つものは特にじっくりと考えて、長期の展望に立ち施政を施して貰いたいものである。

かく言う私も戦中戦後の物資もない、食料もない時代から今迄、自動車産業の一角で働かせてもらって来た。考えなしに我武者羅に働いて来たのかも知れない。職場を離れて改めて、旧来の考えを引きずっている自分の考え、社会の仕組みを、じっくりと考える余裕が出て来た様に思える。

此処らで藝びた東北の温泉にでもゆっくり浸かりながら、来し方、行く末を静かに考えたい思いであるが、新幹線で一飛びでは、何となく旅情が湧かない様にも思える。かって東海道本線に蒸気機関車が走っていた頃、沼津当たりの主要駅では10分程度の停車時間があり、肩から弁当を下げた販売員が声をか

らしながらホームを売り歩き、お客は車窓から手を振って買い求めて、特産品の詰められた弁当をゆっくりと食べ、車窓においたお茶を飲みながら、隣人と話をしたり、緑の車窓を見ながら、のんびりと汽車の旅をした事を思い出す。

最近の普通列車の編成を見ると、非常に距離が細切れで『鈍』なる旅に不向きなのは、鉄道会社が新幹線で利益を上げようと言う魂胆かと、僻みたくなるのは私だけであろうか？

大阪日帰り出張が可能な新幹線時代ではあるが、一秒の時間をも惜しむ新幹線ではなく、旅は鈍行列車の様な、心に余裕がもてる旅をしたいものである。これは私の単なるノスタルジアなのであろうか。

先程の学校入学の仕方であるが、米国の様に希望者は皆入学させ、その後の勉強に対する意欲、学習能力、等をじっくりと観察して進学者を決め、付いて来られない者は退学と言う制度の方が、人を正しく選べるもの出あり、必要な良い人材を得られるのではないか。一日か二日で人材を選ぶ様な短絡ではなく、いわゆる『鈍』の人材教育の方が、ゆっくりとものを考え、真理を明かす人間を得られるのでは無いかと思う。特に戦後50年以上平和を守り続け、日本の繁栄に寄与して来た平和憲法の改正等、特に『鈍』なる慎重な検討と、全国

民の一時的な現象に左右されない意志決定を望まざるを得ない。税金の大半が兵器調達にならない様、軍需産業の繁栄は決して国民の幸せには繋がらない事を、戦中戦後を経験した者として肝に銘じて感ずる者である。

『鈍』と言う字が何となく、私は好きになって来た。

老い先短い者であるが、そんな事はあっちに放り捨てて、鈍と構えてこれからの人生を、エンジヨイしたいものである。

次の格言と言葉は私の好きなものだ。

巧言令色

鮮し仁

……論語より

そして「急がば回れ」と言う言葉である。

ともしび

真っ赤な太陽が 明日の晴天を保証するかのように

南アルプスの山々に 沈み

富士が 黒いシルエットを 浮かべていた。

夜の静かなとばりに、包まれた 家々

大きな二階建の窓からも

小さな 小さな 平屋の家々の窓からも

私に呼び掛ける様に かすかな ともしびが伝わって来る。

涙を浮かべながらも

ふくよかな母の乳房に、しっかりと しがみつく 幼子

汗を拭った真っ黒な手の 子供たち

「昔はなー」と同じことを繰り返す老婆に

にこやかにうなづく 父親の まなざし。

一灯のともしびの下で

確かめ合い、暖め合う家族の 絆。

二つのともしびは要らない。

一つの ともしびが あれば良い。

きつと神様は、この家の明日にも

精一杯生きる力を、お与えに なるだろう。

振り向けば

富士の黒いシルエットも、かすかに うなずいていた。

もくれんの花咲く頃 作

忘却

雨が2、3日続くと、カラット晴れた太陽が恋しくなるものである。太平洋側の比較的恵まれた地に居ながら、やっぱり太陽は恋しくなるものである。普段あまり気にもして居ない太陽、空気と同じく我々になくてならぬものでありながら、私はあまり気に止めぬ存在であった。

昭和30年前半に登場した、太陽の季節・狂った果实・逆光線などそれまでの常識に挑戦した、太陽族の映画であり時代を先取りするものであった。戦後の疲弊からようやく逃れて、神武景氣が始まり、女性の服装がいわゆるラッカサンスタイルとなった頃である。中村好夫をして「もはや、戦後ではない」と言わしめた時である。デモに明け暮れた戦後の『雨の季節』から『太陽の季節』に変わる時でもあった。

窓のガラスを濡らす雨を見ながら、ふと石原裕二郎の「太陽の季節」を思い出し、太陽に興味が湧いて来たのである。

物理的に太陽とは何か？ 文獻その他で太陽を調べてみる内に、私の眠気は

飛んでしまった。太陽の表面温度は6000度であり、中心部は核反応で1500万度に達しており、これから50億年は燃え続けるとの事である。

水の沸騰する温度100度しか我が家に存在しない者にとって、想像出来ぬ温度である。

そしてその直径は地球の109倍、月の400倍もある怪物である。太陽までの距離は、ジェット機で17年、新幹線で68年かかるとのこと、気の遠くなる様に離れていても、我々にあの暖かな日差しを与えてくれて居るのである。それにさらに驚くべき事は、地球に達するエネルギーは22億分の1でしか無いと言う計算である。

我々常識である日常計算の桁の、また一桁外れた数値である。いわゆる天文学的数値である。

一方猫の額のわが家の庭に目を落とすと、野草の中にも可憐な花が咲き、風になびいて居る。

目を持たぬ植物が色とりどりの美しい花を咲かせ、蝶を呼び小鳥を誘い、子孫を残す巧みな技は、これまた自然の偉大さを見せつけられるものである。

あの細やかな花模様、オシベメシベのしなやかさ、人をも誘う香りの豊かさ、

微に入り細にわたった細やかさは、到底人知の及ぶ所では無いであろう。

自然の偉大さを改めて見せつけられた思いである。

『忘却とは忘れ去ることであり、忘れ得ずして忘却を誓う悲しさよ』君の名はの名台詞で、この放送の時は銭湯の女性風呂がから空きになったと言う言い伝えがあった程である。忘れ得ぬ人を忘れなければならない宿命。誰でも持ち得る経験であり感情であるかも知れない。人が人を愛する、人を恋する、これも自然の行いであるかも知れない。嫉妬する感情、怒る感情、失望する感情、歓喜に満ちた感情、人を許せる喜び、我々の心の中に渦巻く日常の出来事である。小さな事かも知れない。些細な事かも知れない。先の天文学的数値から見たら、ゴミのゴミであるかも知れない。自然の大きな流れの中で、笑ってしまう程のささやかな事かも知れない。些細な日常の心の動きである。この巨大な宇宙の時空間の中で、人の心の動き等馬鹿げた事かも知れない。目をもっと大きく開けるべき事かも知れない。

人のエゴ、国家のエゴの為に、人は鉄の弾丸を使い爆弾を使って、人の命を虫けらの様に奪う者である。

生きとし生けるものは太陽の恩恵を受け、野の花の美しく咲くこの恵まれた

地球と言う環境の中で生命を保っている。そして動物達は与えられた意識を持ち喜怒哀楽を表している。

去年来たツバメは、又せっせと巣作りを励んでいる。去年の恵まれた所を忘れずに、愛の巣を作っているのである。翼長10cm程のツバメが越冬した南洋諸島から忘れずに帰って来るのである。

途方もない大きな太陽系の中で、あの小さなツバメが小さな一戸の軒先に戻って来るのであろうか？

『忘却とは忘れ去ることなり』人は忘れてならぬものを、忘れ去って居るのでは無いだろうか。

宇宙の途方もない営みの中に、恵まれた地球の環境の中に、可憐な野の花でさえ、恵みを謳歌し美しく装おっている。

人は何故戦いをするのであろうか。何故人を殺すのであろうか？肝心なものを忘れ去って居るのでは無かろうか。

犬でさえ飼い主を覚えている。飼い主を見る目は暖かさにあふれている。両親のあふれる愛に、取り巻く人々の暖かな眼差しに、育み育てられた者が、何故人を傷つけ戦う事なのであろうか？

人のエゴが、国のエゴが住み着いた心なのだろうか。

忘れてはならないもの、神から与えられた愛の心を、太陽の恵み、自然の暖かさ豊かさ、野に咲く花に心開くべきかも知れない。

もっともっと自然に目を向け学ぶべきであろうと思えてきた。

忘却の彼方に、人の忘れてはならない宝物が在る様に思えて来た。

雨あがりの虹が、私に語りかけていた。

暗い夜道の彼方にぽつんと明かりが見えると、人は、
恐れや不安から救われ、勇気と元気が再び湧いてきます。

希望とはその明かりのことです。

あなたの内にも、同じ明かりが秘められているということを

ご存知ですか？

*When you find a light in darkness, you will be relieved
from fear and anxiety, and you will gain courage.*

Hope is this light.

Do you know that this light also exists inside of you?

友 達

定年を迎えた私を心から迎えてくれたのは、
自然の美しさだった。

年の初めの、初日の出を迎えるあの騒がしさ
海岸で焚き火を焚き、

ザワザワと大勢の人が迎える初日の出と異なり

一人で、堤防の上に立つと、

朝日が箱根の山を越えて、私一人に挨拶してくれる。

今日も元気かい！ 頑張ってねと。毎日挨拶してくれる。

あの暖かな、あから顔をして。

涼しくなったら、ススキがなびきながら、

朝の挨拶をしてくれる。今まで一面識も無かった私に腰を低くして、丁寧にお辞儀をしてくれている。

ちようちん草のかわいい花が、

2つ並んで風に揺られながら、私を待っていてくれる。

黄色の花弁が恥ずかしそうにちょっと顔を出したりして。

私の足元に、名も知らぬ可憐な野の花が咲いている。思わず踏みそうになって御免ねと、心の中で叫んでしまう。誰にも見られない小さな野の花よ。何時迄も、私の友達でいてほしい。

電波時計に寄せて。

私は三年程前に何の記事だか定かに覚えていないが、電波時計について印した記事を読んだ事がある。それが脳の片隅に鳥の巢のよう巣食ってはいたのであるが、わが家に数個ある普通の時計が、人それぞれ個性がある様に少しずつ遅れたり、進んだりするのを、テレビの時報を見ながら時々直したりしていた。

時計の針を見ながら、父母の形見の時計やら、あるいはその時計を手に入れた時を思い出しながら直す事は、私に取っては人に対し、時計に対する愛着であり、それが自分自身を見直す様な気持ちさえしていたのである。

だから十万年に一秒も狂わないと言う電波時計とは、私は縁が無いものと思っていた。

でも二年ばかり前に、手頃な値段の電波時計を店先で見つけてしまった。そして丁度職場を離れる人がおり記念にお送りした所、翌朝早速お礼の電話があり、

「朝起きたら魔法使いが合わせた様に、月日も時間も独りでにすっかり合っ

いた」

とのこと、私の電波時計に対する拒否反応を少し傷つけた出来事であった。

そして今度は八十才過ぎのお年寄りが長期に入院する事になり、合わせる必要がない電波時計が良いと思って病床にお送りした。

そして電波時計について多少説明しておいた所、回診のお医者さんの眼にとまり、私からの受け売りの説明をした様であるが、医者は初めて見る電波時計を感心して見ていたとのことで、八十過ぎのお年寄りに、すっかり気に入ってもらって良かったと思っている。

そしてそれは又、私の拒否反応を更に傷つけ、薄れさせるものとなっていた。

人に送っておきながら、自分は触った事もない電波時計、『又年寄りに尚聞かれたら困るな』との思いも合って、とうとう自分の節操を破って買ってみた。そうすると前述のお礼の電話の様に、朝になったらピタッと日付も時刻も、テレビの時報と寸分違わず合わせてあるので、私も改めて驚いた次第である。

すると今度は、時計を合わせると言う目で見ていたテレビの時報が、『この時計がいかに正しく合っているか』と言う正しさの確認の実証を眼で見る様に、

私の心は変わっていた。何事も独り善がりの、回りを無視した信念は良くないのかも知れないと、この歳になって悟った次第である。

一年半程前の工業新聞に、電波時計の記事が少し出ていた。

首都圏で二十から四十才位の働き盛りの人を対象に、電波時計に対するアンケートを取った所、腕時計を含め十五％の人が電波時計を所持しているとの事で、少し前の時より確実に使用率が増えているとの事である。

《使用によって時間感覚が変化したか》との問い合わせに対して、『不安感が無くなった』『絶対時間を所有する満足感』等のイメージを寄せる人が多いと書いてあった。

私を含めてたいした事でも無いのに、ちょっとした事が、人間の感覚を変化さすものだと、改めて感ずる結果となっていた。

それにしても工業に携わった者として、進み行く世の中の変化、人の心の変わり様、それをいち早く先取りした製品を世の中に送り出す必要性を、強く感じさせるものであった。

『時の流れの様に』と言う私の好きな歌がある。電波時計という、ちよつとし

た石が流れにさざ波を起こさせ、流れに変化を与える現象を見逃しては、流れに乗った者では無く、流れに流された者、となるのではないかと、改めて危機意識を強くした、この頃ではある。

この優秀な電波時計の機能をさらに増し、秘書役の努めも持たせらる製品が出来るはずだと、心密かに夢見る者である。

理想を思い描くには、豊かな想像力が必要です。

そのためには、日々の生活のなかで、

常に美と調和を見いだす心がけが大切です。

そして、理想にむかって一步一步近づくのです。

To develop an ideal, it is important to be imaginative.

You must always think of harmony and beauty in everyday life

And you will get closer to your ideal step by step.

時の流れに身をまかせ

『時の流れに身をまかせ』私には嫌な言葉である。大勢に従う。長いものは巻かれる。日和見主義。そして身を守るに一番安全な考え方かも知れない。でもないやな言葉ではある。何となく嫌なのである。

なぜ嫌なのか？と問われても、やっぱり嫌なのである。強いて言えば、そんな考え方で改革は出来ないし、進歩は望め無く、権力のある、力のある者たちの世界になってしまうからだ。とでも言うしか無いのかもしれない。もしかしたら、心の何処かで命をかけた明治の改革者たちにより、日本が封建時代から近代化に転換する偉業を果たした事に対する、憧れが存在しているのかもしれない。二、三代先人のたぎる血潮が、私の中に生きているのであろう。何となく嬉しくなってきた。

さて、日本は昭和二十年八月十五日に敗戦を迎え、軍国主義、現人神から、民主主義に変わったのである。日本人が勝ち取った改革では無いかも知れない。いや無いのである。でもそれが『時の流れ』になったのである。敗戦前私は現

人神の国を守るため、自分の命など惜しくは無いと心の中で本当に思っていた。日の丸の旗を纏にかけ、全校生徒の前で予科練に志願して行った友達が、憧れの的であった。それは日本人として当たり前の気持ちでいたし、何の疑問もたぬ自分であった。およそ『時の流れ』等意識して生きて来た人間でなかったのである。そしてその後も敗戦で与えられた平和新憲法の元に慣れ過ぎて、心が眠っているのかもしれない。そんな私でも最近憲法改正が叫ばれ出したり、有事防衛が叫ばれ出したりすると、戦争の悲惨さを体験して来ている者として、此処らでそろそろ眼を覚まして、このまま『身をまかせ』ていて良いのかどうか、多少気になる所である。

そして心に引っ掛かる古き事柄として、私がまだ小学生の頃、地理的にも非常に近くに起こった事件であり、軽飛行機から反乱兵士鎮圧の為に蒔かれた『兵に告ぐ』のビラ配布を目の前に見た「二、二六事件」への遭遇。へんからでも遅くない……との書き出しの、原隊復帰を促す文面が今でも私の心の底に鮮明に焼き付いている。この事件で暗殺にあった者や、銃殺の処刑にあった者が大勢いたが、『時の流れ』を変え様とした、彼らの主義主張も明らかにさ

れず、葬り去られた時代であった。暗闇の時代であり、軍部はそれを『時の流れ』と、戦争拡大に利用した事である。

五年程前は自分史らしきものを書いて、小さな自分の『時の流れ』を振り返って見ようと思った。その流れの中で、私が成長する節々の一つ一つに親の愛があり、そしてその傍らには、必ずと言って良いほど、家庭の、そして見ず知らずの人の愛が、私を生かしてくれていた。長い病気で死にたいと思っていた時に、他人のかけてくれた一言が私の眼を覚ましてくれていた。自分だけで生きているのでは無いと、回りを眺め共に生きる眼を、その『時』に与えてくれていた。三年間の闘病生活は、私の小さな心に本当の愛を教えてくれた、大切な『時の流れ』の一齣であった。

戦後の物も食物も極端にない時代に、藁入りパンで空腹をしのぎ、資源のない日本が米代を払う外貨を稼ぐために懸命に働いた日々。ここらで会社勤めも終わったら「寝坊したい時には遠慮会釈なく寝るとか、自分の自由な時間を気ままに送るとするか」と心の中で密かに思っていた矢先『時の流れに身を任せ』等と、気ままにしているでは居られない身近なニースを仕入れてしまった。

それは、最近研究されだした「体内時計」なるものの情報である。体内時計なる遺伝子を我々は先祖代々そのまま受け継ぎ、また伝え様としている事である。お腹かが空いて来ると「腹時計が十二時だ」等と言っていたが、本当に動物は「体内時計」を授かっているらしい。そして、一日二十四時間の体のリズムを司どっている。朝の目覚め、昼の食欲、夜の睡眠、等々毎日の生活リズムを、規則正しく保っていてくれるものであるらしい。

でも、でもある。我々が受け継いだその「体内時計」は、どこでどう間違ったのか、一日が二十五時間なのである。地球のリズムと一時間の時差を生じてしまっている。もし我々が、『時の流れに身を任せ』とばかりに綴じ込められた部屋に吞氣にしていると、逐次ずれていって、目覚めの朝がやがて暗闇の夜の時間になってしまうらしい。体内時計なる現物は眼と耳を結んだ線上に左右一つずつ存在していて、米粒位の大きさらしい。動物の「体内時計」を取り出すと、夜昼リズムが付かない状態になると言う。

私たちは朝起きて各種刺激を与えられる事で、「体内時計」の時差を調整できるらしい。定年を過ぎたからといって、朝寝坊して、朝食が昼に変わり、外え

も出ずにのろのろしていると、一時間調整ができず、リズムが乱れる事になる。『時の流れに身を任せ』での一日では、太古から受け継いだ（体内時計）を地球に合わせる調整が出来ないのである。そして夜になると胃が痛いとか、血圧が昇るとか、一日の時間のリズムに関する症状には、最近「時間治療」なる言葉の医学用語までが出来て、盛んに活躍しつつあるらしい。まことに『時』はおろそかに出来ないわけである。神様は日々『時の流れ』を疎かにしない様にするために、わざと地球の自転に対し一時間狂わしておられるのかも知れない。過日全世界の注目を浴びながら白昼堂々と大往生を遂げた宇宙船ミール、地上と違って一日が夜と昼で構成されて無い世界、宇宙に出たら一日二十五時間も宇宙歴なるものを作って、全世界からメールを貰いながら生活する時代が来てもよいのでは無いかと思っている。自分には実現性の無いことではある。でも宇宙暦の提唱者として、その『時』を夢見て生きていたいのである。そしてその時代を、冥土の障子の破れから眺めていたいのである。

私は最近『青い鳥』の作者メーテルリンクの書いた『花の知恵』なる本に、私の師匠である中央図書館で接することができた。又さらに植物の生態学で多

くの執筆をされている多田多恵子博士の、『植物の知恵』なる文献も少し読まして戴く機会があった。

植物は、動かない。神経も脳も持たない。声も立てない。地に縛りつけられている。まさに風まかせ、虫まかせの世界である。

そして種の保存に欠かせない繁殖活動も動物である昆虫にまかせるしかない。まさに植物は、『時の流れに身をまかせ』の受け身の典型的な存在であると思っていた。

ところがどっこい、それは私の浅はかな知恵である事を悟らされた。読めば読むほど植物たちの知恵の鮮やかさに、圧倒されるのである。確かに繁殖の受粉は昆虫にまかすのであるが、そのための工夫、また種を保存し運ぶ手段、今年と来年に別けて発芽する種の工夫を持っている植物等、私が感じていた『身をまかせ』所ではなく、あらゆる手段と、戦いをもって進化してきたのである。そして植物と昆虫との共存共栄と言う、静と動、驚くべき哲学を作り、全世界で醜い殺し合いの続く人類社会を尻目に、栄えて来たのである。正に国連の学べき姿であり、手本である。

一例をあげれば沼や泥炭地の水底に生える「タヌキモ」なる植物は、開花の時が来ると葉腋の小さな袋は空気で満たされ、「タヌキモ」特有な軽さで水の表面に運ばれ、その時はじめて小さなかわいい黄色の花が咲く。花は優雅に泥水を見下ろしながら、みずみずしい色を漂わせるのである。しかし受粉が済み実が実って来ると、周囲の水が袋に侵入して、「タヌキモ」は泥土の底に帰って、又新たに一人前の植物として成長するのである。

最近話題になっている、海底からの船舶の引き上げ技術などは、太古の昔から植物は日常茶飯事な事として、行っていたのである。

多田さんの書かれた文章を一部お借りすると、「縄文時代の遺跡から出土した種子が数千年の眠りから目覚めて芽を出した例もある。種子は、はるかな時空を旅するタイムカプセルでもあるのだ。私たち人間を含めて、動物は「現在」の時しか生きられない。だが植物は、種子と言う精巧なカプセルに生命情報を含め込み、未来空間に送りだす事に成功した。植物はその『知恵』をもって、自らは動かないまま、時空を越えて生きる能力まで手に入れてしまったのだ」と結んでおられた。

一九世紀中頃に「ダービンの進化論」が発表され、植物も数億年という時を費やして、進化して来たのかも知れない。でも子孫を残す為のあの巧みな姿、『知恵』は、進化という一言だけで済まされる現象とは、私には到底思えぬすばらしい出来栄である。

長い長い、時の流れの中に、この地球上で一番『知恵』が発達し、能力があると自負している人間、もっと謙虚にもっと広い心で、共に生きるすべてのものに愛情をもって、見つめ、生きて行きたいものと思った。十九世紀から二十世紀二十一世紀と、政治の流れや、科学の発達が目覚ましい時代に生きている者として、時の流れに没する事無く、植物の様な賢明な『知恵』をもって、一日の生活のリズムを整え、一年を、そして百年の大河に『時の流れに身をまかせ』！そして時には、『時の流れに竿指して』、無い知恵を絞って明日という日を、生きて行こうと思う。でも、でもある。ここまで書いて来て、私は次の聖書の御言葉が心に蘇ってきた。

『だから、明日のことで思い悩むな。明日のことは 明日自らが思い悩む。

その日の苦勞はその日だけで十分である。』

マタイ六の三四

華麗（加齡）なる想い

華麗なる想い。

なんとなく華やかで、ロマンチックに富んだ言葉である。そしてその想いは、社交性に富んだ、豊かな華やかなる雰囲気と、希望あふるる、豊かなる心に満ちている様に思える。次代を託したい、あこがれに富んだ思いである。華やかな社交ダンス等を連想さす思いでもあり、青春から成人の多く者が、抱く思いであらう。

加齡なる想い。

何となく、避けて通りたい言葉であり、思いたくない言葉である。そして社会を巡り来った、豊かなる経験を元にした思いではあるが、多少頑固な一面を持つて、他者の入居るすぎがない雰囲気でもある。経験から発する思は、なかなか曲げがたい思いである。そして次世代に、その経験を託したい思いを、多分に含んでいる様に思う。

日本語はまことに面白いもので、上記二つの言葉を発音するのに、区別が出

来ないものでありながら、意味はだいぶ異なっているのである。 上記二つの言葉に対する意味付けは、別に字引を引いたものでもなく、私の勝手に付けたものであり、人それぞれに意味付けは異なると思うし、それはその人の置かれた環境によって、大きく左右されるものと思う。そして私は、華麗プラス加齢なる思いに憧れる者である。

天は人に二物を与えずと言われている。欲張った思いかも知れない。そして喜寿を過ぎた私は、加齢（華麗とも思いたい）なる思い、であるかも知れない。でも華やかさに憧れる心と共に、また次世代に、思いを馳せたい気持ちが強いのである。



まず第一に思うことは、最近私の心の中に、変化が生じて来たものを挙げたい。

一言で言えば「せっかち」になったと言えるのかも知れない。でも自分の心の中では、「せっかち」とは思っていない。

具体的に例を挙げると、これはすべきだと思うことは、まず《今日出来ないか》と思う事が強くなった事である。もう少し若い時は、《まあ明日があるさ》

と比較的呑気に構えて居たのである。それを今日差し支えなければ、実行することにしたのである。

明日でも良いものを、今日行うということは、確かに「せっかち」に見えるかも知れない。でも私に対する、明日への保証はないのである。齡を重ねたから、その思いが増えたのかも知れない。でも、若いと言っても交通事情等を考えると、やはり明日への保証はないのである。

たまたま先日墓参の為、私の乗った東京の市営バスが、事故を起こしてしまった。半年に一回位の東京参りが、事故の渦に巻き込まれてしまったのである。バスの事故は、今までに私は経験した事はなかったのであるが、サイドミラーを、曲がりかけて停まっていた、トラックの荷台の角にもろにぶつけて、がちり固定されているミラーとその支持部を、粉々に壊してしまったのである。一瞬大きな音がして、運転席のすぐ後ろに乗り合わせた私は、運転席のあの大きなフロントガラスが粉々に割れ散り、乗客に当たったと思ったのであるが、幸いサイドミラーが壊れただけで、怪我人はなかったのである。自分が運転しているのではなく、安心しきって、バスに身も心も託しきっていたのに、突然の大音響である。一瞬の恐怖心が私を襲っていた。でも、その一瞬が過ぎ、フ

ロントガラスが壊れていないのを確認すると、ほっとした気持ちに戻っていた。でもバスは代替え車を呼び、お客はそれに乗り換えて用を足したのである。

一般的に慎重な運転者が多いバスであるが、私の乗っていたバスが事故を起こした事は、私の安易な気持ちをおち破るもので、貴い経験であった。やはり明日は保証されて無い、と言うことを身をもって経験し、私に必要な大きな一つの示唆を、与えてくれていた。



第二に想うことは、『人を愛する』と言うことである。

これは加齢ではなく、華麗に属する事かも知れない。いややはり華麗プラス加齢である。「愛」と言うと、よく人は「恋」と同意語に感ずる人がいるが、字引を開いて見ると愛とは「相手のしあわせや、発展を願う暖かい気持ち」と出て来た。聖書のコリント前書にも「愛は己の利を求めず」と出ている。一方「恋」は同じく字引を引くと「男女の間で会いたいと思う強い気持ち」と出て来た。そこには自己が厳然として存在しているのである。

自己否定と自己存在との違いである。自己否定は非常に難しいことである。電車に乗って、お年寄りに席を譲ってあげる事は、比較的自分自身に抵抗なく行

われる事である。でも道を渡っている目の不自由な方の手を取ってあげる事は、私には抵抗がある所である。大勢の人の目を乗り越えて行う事は、やはり勇氣があるのである。何となく恥ずかしいと言う気持ちがある。そこには自分がやはり存在するのである。

この小さな行為の中にも、自己を否定し得ない弱さがあるのである。

でもそれを取り越えられる所に、本当の愛があり、どんなに小さい事であろうとも、自然に真に人を愛せられる事こそ、本当の生きがいがある、おのずと生ずるのだと思う。

NGOで、後進国の人々の為に、身を粉にして働いている若い人々、近ごろの若い人々は『えらい』と、私は言いたいのである。

人生の中の貴重な数年を、求めている人々に捧げる貴さ、これより大きな愛は無い様に思える。我々の若い頃は、自分の命は返り見ないと言っても、憎み合い、人を殺し合う戦争に人生を託した事を思えば、物質的に恵まれなくても、人を愛し、その中に生き続ける事ができれば、人として、どれほど価値の有る生涯であったと、感ずることが出来ると思う。国のためとは言え、敵を憎み殺す人生の価値観から、人を愛し共に生きる価値観へと、我々から見たら、一八

○度の転換である。

後進国のやせ細った子供達をテレビで見る度に、同じ人間として、飽食の中にいる日本人として、何もなし得ない自分を、不甲斐なく思うのである。我々のおかれて居る平和を、全世界に及ぼし、大事にしたいものである。『人を愛する』と言うことは、『己』が無いと言いながら、目には見えなくても、また望まなくても、結果的にはいろいろな形で、自分に幸せとして、帰って来るものの様な気がしている。

『人を愛する』とは、その華やかな響きの中に、己に科する重さと、きつく辛い事も多い事と思われる。でもそこに、心に計り知れない、大きな喜びとして、生きて行きたいものである。

◇
第三に想うことは、『生き甲斐』と言うことである。

定年を過ぎた我々は、時間的に余裕がある様で無いのである。

確かに会社勤めと比べれば、自分でコントロール出来る時が多いのである。従って怠けて居れば、極端に言えば、一日中何もしないで、寝て居る事も出来るのである。つましくして居れば、年金で何とか生活出来るのである。父や母な

どの年金制度など無い昔の人の苦勞を思うと、正に罰が当たる思いである。

昔私が小さかった頃、《眠り人形》と言うのが我が家にもあった。

起こすと乳首をくわえ、寝かすと青い眼を閉じるのである。そして可愛い顔をして、我々を慰めてくれていたのである。人形としてその目的を立派に果たしていたのである。

私には人形に対抗する、美しい目も顔も無い。可愛らしさも無い。何をもつて私の『生き甲斐』とすべきなのか。

体が動けるのに何もしない。頭がまだ使えるのに何もしない。回りの人に暖かい言葉も発しない。これではひいき目に見ても、自分として

『生き甲斐』を感じる訳に行かないのである。せめて動ける間は、多少でも考えられる間は、生き甲斐を求めて自分を叱咤激励したのである。

最近流行のボランティアにでも参加出来て、自分の持てるものを發揮出来たら、大きな生き甲斐になるのではないかと、思い巡らす日々である。わが家の近くの海岸を三十分程歩いてみても、空き缶やらゴミが結構落ちていたのである。きれいにされている所に、ゴミを散らす人に腹だたしい思いをすると同時に、毎日黙々とそれを拾い、道端の雑草を抜いている人々が居り、その人に会った

に頭の下がる思いがする。私も小さな事で良い『人の為になる、生きがい』を求めたくなる思いである。体が動けなくても、頭が働かなくても、その人がそこに居ると言う事だけで、皆が慰められる様な、そして皆から慕われる様な『生きざま』が作れたら、最高の人生では無いかと思うのである。意気張る事なく、存在感のある人間になることを目指すのが、私の理想の最高の『生き甲斐』ではないかと思う。私には非常に難しいことであるが、その為に第四の思うことを、頑張らねばならぬと思うのである。



第四に想うことは、『己を鍛えること』である。

昔よく五十の手習いと言っていた。私はそれに対して、三十年近くもオーバーしている。昔の学説では、歳を取ると脳の細胞が一日何万個と死滅するのだと言われていた。だから脳みそが小さくなるのだと言われていた。でも最近の学説によると、磁気共鳴装置等で、脳の仕組みを細かく計ることができ、脳の使い方次第で、減るのではなく、増すことも有り得ると言う発表がなされた事を聞き、大いに心休まる思いである。最近110万部の売れ行きのベストセラーとなっている、聖路加病院名誉院長の日野原重明先生の『生きかた上手』

を拝読する機会があったが、九十才を過ぎた方なのに、新しい在り方に挑戦する意欲と、学習する力の強さと、またそれを実践される強さに、敬服せざるを得なかった。練達と言う言葉がある。年を取って円満な穏やかな言葉を吐くと、「心が練れておられますね。」等と半分お世辞の様な言葉が帰って来る。

でも、何事もまあまあ許すと言う事よりも、悪いことは悪いと言える勇気を鍛え持たいたいものだと思う。白でも黒でも良い様な事で争いたくは無い。でも自分の良心に従った強さと、発言をなし得る自分でありたいものと思っている。私をまだ、鍛えがえのある年寄りだと想いたいのである。

頭を鍛えるつもりでも無いが、私は買って1年以上ほったらかしてあったパソコンを、子供の勧めで使い出したが、豊富な機能に付いて行くのに悩む毎日である。でも最近の男子の寿命平均年齢が七十四、五才とか出ていた。その歳を過ぎたとは言え、昔の五十才の寿命から二十五才も増えているのである。私もあきらめずに、鍛え直す事が必要と、私なりに取り組んで居る所である。これは慌ててノイローゼにならぬ様に、急がずあわてず、自分のペースで進めて行きたいと思っている。趣味的には、体も何とか動ける事であり、頭もまだ今朝のご飯位は覚えていられるので、何か趣味をもって「己を鍛える一環とし

たい」と思っているが、自分一人で楽しんでいるだけでは、何となく物足りない気がするの、まだその趣味に、真剣に打ち込めてないからだろうか？

自分が今まで行って来た技術を、もう一段鍛え直して、何か役立つ事が出来たら、もっと生きがいを感じるのでは無いかと、ちょっと変わった歯車を頭の中で組み立てて、夢の思いを巡らせている現在ではある。

体を鍛えると言う意味で、会社を辞めた四月から朝の散歩を始めたが、自分でどのくらい続くかと、自分を試す意味も含めて取り掛かったが、何とか半年続いているのは、まあまあ出来であろうと、自分を評価しているのは、少し甘い点数であろうか…？

私ぐらい歳を取ると、回りの人は遠慮して、あまり忠告してくれないので、自分で自分に試練を課して、自分で評価するのが良いのかと、思う様になって来た。まさに自分による、自分に対する試練であり、自分による評価であり点数である。多少甘くても、多少きつくても、これが一番私を鍛えるに、良い方法の様に思えて来た。

第五に想うことは、私は子や孫たちに、何が残せるかと言う事である。子供

は親の後ろ姿を見て育つと言うが、私の後ろ姿は、戦争の中の姿であり、我武者羅な戦後の生きざまであり、その意味では、到底子供や孫たちに残せるものではないが、日本がそして多くの人々が払った犠牲の中に感じた事を、つたない文章に託して、子や孫たちに読んで貰うのが、この世に生かしてもらった私の、務めでは無いかと、エッセイ等に託して書いているのである。語り切れない思い、表わし得ない思いに、歯軋りする者であるが、駄文に託してでも、残してゆきたいのである。

子や孫に残す財産として、私の心の総てを、語り尽くしたいのである。そしてそれしか、私には残せるものは無いのである。その為に私はもっと感性を、鍛えて行きたいのである。もっと書いて行きたいのである。私の心に感じた真実の姿を、人々の貴い善意の姿を、そして人として持っていなければならぬ、私たちの心を、少しでも伝えて行きたいのである。

この美しい地球に生を受けたものとして、人として、人間として、どの様に生き、どの様な心を持つべきかと、子や孫たちに、思考しそして実行して貰いたいのである。

◇
◇
人が人を殺す、あの忌まわしい二十世紀に大半を生きた者として、
二十一世紀に生きる子や孫たちに、誤りの無い人生を、送って貰いたいのであ
る。

∴
その祈りや、切なのである。
∴

人に何かをしてあげると言うのは、

簡単なことではありません。

時にはただ見守ることの方が大切な場合もあります。

相手の心を知るには、謙虚さ、そして愛が必要です。

It is not easy to do something for someone else.

It is sometimes better to simply just watch.

In order to understand someone's feeling,

having modesty and love is necessary.

自動車 秘話 あれこれ

「あー腹が減った。白い銀飯を腹一杯食べたいなあ」

と言いながら、会社から配給になった菓入りのパンを噛りながら、耐火レンガの囲み中にニクロム線を巻いた、手作りのヒーターを抱えながらの仕事である。昭和20年8月15日の終戦の日を迎えた日産自動車吉原工場は、約3ヶ月して、飛行機用のエンジン工場から、ダットサントラックの生産工場に、衣替えしていたのである。

工場南側に設置されていた、人を飛ばす程の風速と爆音を轟かせていた、飛行機用エンジンのテスト台は静まり、学徒動員の生徒達は居なくなり、敗戦による賠償対象の解除によって、機械につけられて居た名札が取られ、一応平和な工場になったのである。天皇の敗戦受諾のラジオを聞いたその時点から、工場は元より社会全般が一変していた。生きる目的を失った我々、物資特に食べ物の少ない日本は、ヤミ市の横行、輸送手段の欠乏と相俟って無法地帯に近い状態であった。発電量の少ない日本では、今年の工場の使用電氣量が、来年

の電気割り当て量に影響し、少しでも多く消費しておかねばならぬ事情から、真に贅沢なニクロム線暖房が許されていたのである。

鉄道と言う鉄道は、高く売れる都会のヤミ市に、肩に背負って物を運ぶ人達に占領され、自動ドアでない当時の汽車は出入り口まであふれる人を乗せて走っていた。そして我々の一カ月分の給料も4〜5日のヤミ市運びで取れると噂されていた。

それほど輸送手段の乏しい時代に自動車を作る、正に花形産業である。でも、一今から自動車を作ったって、アメリカから自動車がどっと入って来たら、すぐ潰れちゃうよ」と横浜工場から来たアメリカ通の或る人は、東北の学校の教師として、会社を見限って退職し、赴任して行った人もあった。

その様な背景で、占領軍のGHQから許されて、昭和21年7月からダットサントラックを世に出す工場となったのである。

幸い飛行機のエンジンを作っていたので、自動車のエンジン回りは、たいした設備を投入しなくても出来ていた。

遠心鑄造によるピストンの鑄物、楢田に削る技術等々、わりに立ち上がりに問題はなかったが、問題はトラックと言えども、運転席、荷台等の車体がい

るのである。ガラスも鉄板もほとんど無い時代、へそのころ出来た社宅のガラスは、写真に使った乾板のガラスをつなぎ併せて作られていた。そこら立ち上げるのである。

トラックの運転席回りの柱には、木材の柱を利用せざるを得なく、左右のドアの鉄板部分に相当する所は、ベニヤ板で作られていた。カーブガラス等は勿論なかった。正に走る木製小型直線トラックである。

でも輸送三段の乏しいその頃の日本では、小型のダットサントラック1台が、普通の家の建築費の2倍近い値段で売っていた。せめて普通の家1軒位の値段にならないかと言う思いが、その頃したのを今でも覚えている。



其の頃工場の中に、時々馬糞が落ちていた。今では考えられない話であるが、工場内の重量物の運搬を馬がしていたのである。したがって、当然其の廃棄物もあった訳である。ちり取りをもって取り除いて居るのを見かけた事が間々あった。あのおとなしい馬も戦後の復興に立ち上がっていたのである。

工場外の道路を隔てた町角に、馬の馬蹄を作る鍛冶屋さんが終戦後2、3年存在して居たのを覚えている。忘れ難き思い出である。

◇ ◇ ◇
昭和22、23年頃の話で有るが、正月の会社の年始は、まず横浜工場で行われ、2、3日遅れて吉原工場に社長が来られて、全従業員の前でお話しされるのが習わしとなっていたが、当時の川又社長が自動車の生産を年1万台にするのが夢であると、言われていたのを覚えている。その頃は我々の感覚では年1万台とは、夢の様な話と受け止めていた。現在思うと正に隔世の感である。

日本でも多少鉄板が作れる様になり、ベニヤ板の自動車から変わった時であったが、今度は工場の通路と言う通路に自動車が所狭しとおかれる時が来た。売れる製品が出来ないからである。

別に性能が悪い訳ではない。自動車の生命とも言われるタイヤが手に入ら無いのである。オフラインする時にタイヤを付けた車は、工場通路の空き場所までくると、車の下に木製の台を置き、タイヤを外して次のオフライン車に取り付けて、また次の置き場まで走ってタイヤを外すのである。オフラインする車を止めない為に、タイヤを外してはトライ回しにするのである。タイヤを作るゴムが日本には無かったのである。その頃月産50台程度の生産であったので、工場の外にははみ出す、一月程で解消していた。今思えば夢の様な話であるが、

深刻な問題であったし、自動車生産が総合産業の上に成り立っており、各種産業が戦後の復興を早めないと成立しない事を、身に染みて感じた時であった。

◇

◇

◇

トラックの生産が許されて約1年経った昭和22年8月、乗用車の生産が許されて、ボデーのプレス化が始まったが、まだ舗装率が少ない日本の道路で、傷まない車体を作るための試行錯誤が始まっていた。車体の各部にストレンゲージ（歪みゲージ）を張り付けて、凸凹道を走行するのである。まだ富二宮から富士山麓の朝霧高原に通ずる道が舗装されてない時代で、富士山の溶岩で凹凸の激しい登り道を走っては、車体のどの部分に応力がどの位加わるかを調べるのである。運転する者も相当の疲労が加わるのであるが、テストに行く時は必ず2台の車で行くのである。まだ車の通行も少ない時代で、冬等に、もし故障でもしたら、凍え死に成りかねない訳である。トラックの足回りを使っていた、当時のクッションの悪い車に、苦勞して上り下りして行くテスト車の傍らを、アメチャンの車（アメリカの大型車）に乗ったご婦人が、たった一人でスイスイと通り越して行くのを見せつけられて、自動車技術の遅れをつくづくと感じさせられたと、実験担当者が言ったのを覚えている。

◇ ◇ ◇
そのころテストに走る車のトランスミッション（変速機）の歯車の歯が欠ける事が偶にあった。炭素鋼に焼き入れしただけの材質では、苛酷なテストに耐えられない場合があったのである。その頃乏しかったクロームやニッケル等の合金鋼が、手に入らなかった為である。転位歯形の採用、材料の入手等で解消した事であった。

◇ ◇ ◇
昭和25、6年の頃であるが、自動車に乗りたいと言う願望が普及した時代であった。でも今の様な自動車教習所は一つもなく、自動車の普及率も少ない時代であったので、まず自動車免許を取る手段も無かった時代である。たまに講座班なるサークル活動があったので、社内の従業員を講師に自動車講習会を時間外にしてもらう事にした。5名程の女性を含めた40名程度の受講希望者が集まり、法規並びに構造の座学の後、運転練習の講座が始まったが、1台ないし2台の車で、5、6分乗っては次ぎの人に替わっての練習である。休日と言う休日はほとんど練習日に当てての練習であった。それでも落後する人もなく、40名の受講者を引き連れて、静岡市にある自動車試験場に赴いた。

さすがに学科で落ちる者は一人もいなかった。でも一人の練習乗車時間合計5時間程度の我々は、第1回目の受験は15名程度の合格であったと覚えている。

まだ自分の車を持てる時代ではなかったが、自動車サークルの車で富士5湖あたりが廻れたら、という憧れに似た気持ちにあふれた時代であった。免許を取った女性は度々警官に呼び止められたそうである。まだ女性のドライバーは殆どいない時代で、無免許運転を怪しめられた時でもあった。

その頃は、タクシー運転手に必要な第2種免許なる制度も無く、後にその制度が出来た時に、その頃に免許を持った我々は、自動的に第2種免許も付与され、タクシーの運転手になれる訳である。



世間一般にも、自動車に対する関心が高まって来た昭和33年の夏の事と覚えていたが、吉原で生産していた210と言う形式のダットサン乗用車が、オーストラリアのラリーに出場し、その苛酷な条件を突破してAクラス優勝という金字塔を立て、吉原の町を凱旋旗を立ててパレードした事を覚えている。

日本の車のラリー出場の走りであった。そのドライバーも吉原工場の従業員であり、その強靱な体力の持ち主は、元陸士出身の自動車講習会の先生であった。

◇ ◇ ◇
昭和33年の春頃と思っているが、その頃自動車の変速機はまだ手動変速機であったが、そろそろ自動変速機《トルクコンバーター》研究の噂が国内でも流れだし、ライバルメーカーのトヨタは試作を作り、実験を初めていると情報が入って来た。

その頃試作も手掛けていた吉原工場の工務部でも、トルクコンバーターの図面を設計部より受け、試作ユニットを11月末の完成予定で製作ししたが、インターナルヘリカルギヤー等手動変速機には無い部品の製作である。ヘリカルガイドとピニオンカッターを機械に取り付けて加工するのである。ヘリカルガイドを作るのに約3ヶ月を要するとの事、又ユニットの中の部品である、多板クラッチに張り付ける紙は、国内では製作しておらず、イギリスから取り寄せる手続きが必要となった。トルクコンバーターの羽に相当する部分の組み付けには、縦型のフライス盤を改造して、ローリング組み立てを行っていた。サンギヤーに組みつけるヘリカルインターナルスプラインの加工は、機械のガイドが間に合わず、赤ペンで相手と合わせながら手加工で製作して間に合わせたが、一応問題なく組み上げる事ができた。11月30日納期最後の日は休日で

あったが、関係者が出勤してギリギリに組み上げた事を今でも覚えている。

日産第1号のトルクコンバーター完成であった。

量産になる約6年前の事である。

◇

◇

◇

昭和37年1月の始めに吉原工場10万台オフライン完了の式典があり、1月末追浜工場の完成により、吉原工場からオフライン車の姿は無くなったのであるが、ミッション、ステアリング専門工場として、吉原工場は立ち上がったのである。専門工場として、良いものを安く作らねばならない。

ミッションでは、静粛性。ステアリングでは、操舵感。が主たる品質の問題であった。イタリアのフィアット車のミッションをバラシて歯車の歯形を見たり、軸受け構造を変える提案をして静粛性を向上し生産に移したり、設計と一体になって生産に当たっていた。

◇

◇

◇

またものすごい数の歯車を生産するのに、工数を削減してコストを下げる為に、その頃機械工場では、まだあまり採用されていなかった簡易ロボットを設計製作し、単能機を並べた機械ラインに投入し、工数削減に努めた。その頃の

ロボット採用について、本として公に販売された、伊藤誠一著『産業用ロボット』には次の様に紹介されていた。『日産自動車吉原工場の工作機械へのローダー・アンローダー用のロボットの自社開発の例がある。一時は恐らく月産百台以上のビルディングブロック化された標準設計による工作機械用のロボットが、吉原工場の生産技術部門で作られていた。当時「昭和48年頃」僅か1ロット5台とか、せいぜい10台足らずの生産しかしていなかった工業会加盟のロボットメーカーの、顔色を無くしてしまった様なニュースであった。吉原工場の工務部次長であった吉村志郎氏から紹介されたこの事実は、それが尤も簡単な固定シーケンス型のロボットであったとしても、そのニーズを分析し部品を標準化し、数少ない種類の部品を組み合わせる事によって、それぞれ異なった用途へのアプリケーションを行っている事実は、多くの産業用ロボットメーカーに大きな衝撃を与えたものであった。

この時点での使用台数は、確か1500台、当時の日本のロボットメーカーと呼ばれる企業が、全体の1年間の生産量以上のものを、既にユーザー自身が開発しているという事実であった。』

と書かれている。そして昭和50年3月に『ロボットハンド組み込み歯車生産

加工システム』として大河内記念生産賞を吉原工場は受けていた。私も有効賞1級を仲間と共に、おこばれに預かっていた。

◇

◇

◇

ステアリングとしては、当時まだ市場に無かったバリアブルステアリングと言う、ハンドルの切れ角により、ハンドルとタイヤの回転比が一定でないステアリングを研究所と共に開発していた。箱根の坂の様にカーブの多い所でも、ハンドルを一回転回さなくても用が足りるのである。

でもハンドルと共に回るピニオン歯車と噛み合う直線歯車ラックの歯形が、機械加工では作る事が出来ないねじれ角や圧力角が、噛み合い比率と共に刻々変わる歯形となるのである。したがって冷間鍛造加工で作る必要があった。そしてその鍛造金型の歯形を作る放電加工用の電極を作らねばならなかった。今の様にNC制御の出来る機械等無い時代である。ラック加工用のピニオンを微小に回しながら、設定された動きでラック電極の移動量をゲージを見ながら、徐々に変化させながら、手で動かして放電加工するのである。

まさに手加工に寄るバリヤブルラックの製作であった。その金型で出来たステアリングが、昭和48年頃多量生産されて市場に出されていた。

今度は有効賞2級を戴いていた。

◇

◇

◇

私は自動車免許証を昭和25年に受けていた。行動範囲が広がり、自由度が増し、真に楽しい幸せなものである。でも最初に犯した違反は、美人の女性を後部座席に乗せて、るるん気分で夕方の町を運転していたら、赤い停止灯が現れて振られていたのである。まさにその時一方通行の路を、逆行していたのに気が付いた。巡査の第一声は「住所はどこだ」であった。その瞬間「遠い町に住んでいれば許してくれるのかな」と言う思いが頭の中をかすめたが、どうせ免許証を見られる事と正直に答えた。警察官は書類に書き留めたが、そのころは違反のキップ制等無い時代で、家に罰金通知が来るものと覚悟していたが、一週間経っても、一カ月経っても来ない。とうとう40年近く経た今も来ていない。もうとっくに時効になった事であり、ここに書き留めても問題は無いと書いて見た。

でも、その後スピード違反、一時停止違反で各々一回罰金を取られたが、罰金を取られた違反より、未だに私の心の中に強く残る違反となっているのは、心の時効になっていない証拠であろうか？

それとも、心臓のか弱い私には、美人が苦手なのであろうか。

◇

◇

◇

足の病気の為に、戦地に行け無かった私が、せめて飛行機のエンジン作りにあこがれ、東京から富士の地に来た私であるが、敗戦と言う事柄を通して、車にあまり興味の無かった私を、有無を言わず引っぱり込み、その後の私の人生を車が支えてくれていた。

それは神のいたずなのか、人の一生は計り知れないものである。

でも多くの人々と共に、今まで楽しく暮らせた事を感謝している。そして思えば困難な時代は、また楽しい時代でもあった。

私にファイトを沸かしてくれる、良き時でもあった。

幸せは、自ら築いて行くものと思っていたのに、

向こうからも、近付いてくれるものかも知れない。

幸せは、欲しいものが手に入り、
良いことが起きたときに感じるものだと思われています。
しかしほんとうの幸せは、もっとさりげなく、穏やかで、
いつでもふっと感じられる日常のなかの「平安」のことです。

*Happiness is thought to be having what you want
or feeling how you feel when good things happen.
But real happiness is more simple and gentle.
It is that moment of having "peace" that you feel often in everyday life.*

一言挨拶の効能

春の彼岸の中日、3月21日朝の上り電車は以外にすいていた。北側4人賭けの座席に、私を含めて3人で座席を占領していた電車は、音もなく沼津駅に滑り込んでいた。

暑さ寒さも彼岸まで、と言う季節変化の狭間で、晴れた日ではあるが、冬の名残を惜しむかの様な冷たい風が、開いたドアから降りる客より早く、乗り込んできた。

休日ではあるが、沼津駅には結構な乗客が列を作って、待っていたのである。前髪がきれいに白くなった、小太りの60過ぎと思われる伯母さんと、もう少し歳を取った2人連れの伯母さんが、列の流れに押される様に、私達の席に歩みよって来た。

「どうぞ貴方が座って」

『いえ、私の方が若いのだから』

と、私の前の一つ空いてる席を二人で譲り合っている。

すると私の隣に座っていた40代位の男性が、

「どうぞ」と一言いって席を譲って立つて行った。二人の女性は

「私たち熱海迄ですから」と遠慮していたが、男性はお構いなく立っているの
で、『白髪に免じて、座らせて戴きます』と、一人は私の横に、一人は私の前
の席に座りこんだ。

車両後半の連結を外すので、8分停車の沼津駅である。

「お彼岸と言っても、まだ寒いですね」と、隣の伯母さんが挨拶代わりに、私
に話しかけてくれていた。

「ええ、今年は寒さが、長引きますね。」と、無口で愛想が無いのを百も承知
している私であるが、先程席を譲って手本を示してくれた男性に、少しはあや
かろうと返事をする。

もちろん全然見ず知らずの2人組みであるが、にこやかに話しかけられると、
決して悪い気はしないものである。

ふと目を車窓に移すと、広々と整備された沼津駅北口を彩る樹木が、春の陽
を浴びてさわやかな風景を、垣間見せてくれていた。

「沼津の北口も随分奇麗に整備されましたね。ここは戦時中は海軍工廠が高い
塀を巡らして、樹木等は一つも見えなかった場所ですよ。」と私、

『へえー、この辺はよくご存じですか』と前髪が白髪の上品な女性が話の中に入ってくる。

「ええ、私は戦時中熱海から吉原まで毎日汽車で往復していましたから、何となく知っています。」と言いながら、帰りの汽車が浜松方面の空襲で遅れて、ひどい時は200分遅れの掲示板が掲げられ、とても待って居られないので、発車する貨物列車の連結器の上に立ちながら、帰った事も何度かあり、駅員さんも見えてみぬ振りをして、見逃してくれた時代であったと披露した。

「そう、私は沼津で空襲に会って焼け出され、そして食料と交換する物もなく、小学校の私と妹のお弁当を作ると、お母さんの食べる分がほとんどなくなって、時々お弁当を持たずに学校へ行くと、小使いさんが作った貴重なお芋をふかして、食べさせてくれた事などがあり、当時の事を思い出しながら、連続テレビ番組《おしん》を見て、泣けて泣けてしょうがなかったわよ」と戦後の乏しい食料事情やら、親子の愛情など、話してくれていた。

「それでね、お小使いを少しずつ溜めて、欲しい物を買った時の嬉しさ等は、今の子は味わえないのね。」と、今度は現在の子供の教育論に話が飛躍して行った。「そう、今の子は物が豊富過ぎて、先程の話の様にひもじさや、相手の身

になって考える事とか、お金を少しずつ溜めてほしい物を買う時の嬉しさ、貴さ等、あまり味わうチャンスが無い時だから、体に染みついた教育が出来ないのですよね」と、私も日頃思っていた事を、無二の親友に話してもする様に、無口をすっ飛ばして披露していた。

三島駅、函南駅と人の乗り降りを感じる暇もなく、丹那トンネルを過ぎ、電車は終点熱海のプラットホームに、へもう着いたのか」と思わせながら着いていた。私より先に乗り、斜め前で黙って目をつぶっていた同年配の伯母さんも、目をパッチリと開け、《ああ、楽しい良いお話でした。》と言いながら、ニコッと笑って席を立てていた。

偶然出会った見知らぬ者同士のたった25分間、心の解け合った四人の席、また再び会う事の考えられ無い人達との出会い、目頭を会わせながら、去りたい“えにし”を断ち切って、別れていた。



工場南の通路の傍らで朝のラジオ体操が始まっている。何時もの事であるが、私が体操している傍らを、山梨県から通っているMさんが、「おす」と挨拶して通って行く。私も体操をやめずに『おす』と1秒づつの挨拶を交わす。毎朝

の自然な日課の様になっていたのである。

所が一週間朝の1秒間挨拶の交換が無い。何となく心に引っ掛かりが残るものである。現場に尋ねて見ると、山梨工場の方に仕事で出張とのこと、そういえば立派な体格を持ち、仕事も油の乗り切っているMさん、休むはずはないやと、私の心を納得させた一時であった。……

試作品を一部加工するので、私は慣れぬ手でフライス盤をいじっていた。

「あ、あ、それを削るには、此の刃物の方が良いよ」

と現場段取り改善のベテランのMさんが、刃物を変え切削の見本を示してくれていた。職人さんの手をあまり邪魔しても悪いので、後は私が教わった通り削ると、スイスイスイと削れてしまっていた。やっぱり餅屋は餅屋である。頼まないのだけでも、見かねて手助けしてくれていたのである。

冬の寒い風が入り込む現場で、ダルマストープを囲みながら、3時の休み時間の話に花が咲いていた。聞くとはなしに聞くと、Mさんは山梨のある町で吹奏楽団の一員として、フルートを吹いているとのこと、あの力ずよい手で、あのごつい指で、微妙な楽器を操って、妙なるシラベを出しているのかと、まだ見ぬ演奏ぶりを頭の中に連想しながら、私は一人悦に入っていた。

毎朝のたった一秒間の挨拶だが、私の心にMさんが確りと居座っていた。

◇

◇

◇

身延駅を降りた私は、身延山行きのバスが発車まで10分有るのを確認して、駅前の3畳敷位ある案内板を見上げていた。

すると30代後半と思える女性も案内板を見に来ていた。

「身延山に行かれるのですか」と問うと『私も行きたいのです』と

〔身延線沿線ガイド〕を持ちながら、にこやかに答えていた。

するともう一人70代位の男性も案内板を見に来たので、同じくお聞きすると、今朝東京を發つて来たとのこと、9時11分身延着の同じ電車に乗り込んでいたとは、随分早く出られた事と感心をした。

3人に乗せたがら空きのバスは、身延山三門近くの終点に到着していた。

門をくぐると目の前に、287段のそり立つような階段がそびえていた。

先程の彼女は階段を、我ら男性は男坂の名前に引きずられたかの様に男坂に挑んだ。少し上がると階段と路はクロスしており、彼女は50段位上を登っていた。負けじ嫌いがさせたのか、彼女のにこやかな挨拶に引かれたのか、私も階段を登り始めていた。手摺りが有るとは言え30段位登ると、さすがに一息つ

かざるを得なかった。登り終えると、彼女はベンチで待ち受けてくれていた。

3人しか乗らなかったバスから考えていた私には、久遠寺の境内は結構の人の賑わいであった。4月上旬も過ぎようとする季節ではあるが、薄紅色のしだ

れ桜、白色のしだれ桜が入り交じって、美しいコントラストを作りながら、雲一つない太陽の光を浴びて我々を迎えてくれていた。

各々持って来たカメラを相手に渡してのシャッター合戦に、しだれ桜の舞台は少しも不足してはいなかった。

そして私には、56年前の昭和22年会社の連中とこの地を訪れたおりに、黒のロングスカートの女性が夕日を浴びて立っており、戦争中のモンペ姿しか見慣れなかった私には、その美しさにびっくりし、しばし見とれていた事を披露した。

人間はやっぱり最後の地まで行きたいのか、奥之院・恩親閣まで行くことになった。高低差736m45人乗りのロープウェイは、我々を奥の院山頂に難無く運んでくれていた。さすがに1158mの山頂付近はまだ雪が残っていたが、快晴の展望台からは、富士山を始め白峰三山を中心にして、荒川三山、鳳凰三山が雪を戴いてすっきりと美しい顔を表してくれていた。

山頂駅でお団子を食べたり、下って昼食を共にしながらの楽しい一時を終え、少し歩き過ぎた疲労を温泉で取り戻したい私は、バス停で別れ、下り坂を一人歩きながら、今日の記念に、しだれ桜の苗木を買い求めている。

一人で登ると思っていた私が、駅でのささいな挨拶から語り合い、しだれ桜をバックにシャッターを押し合い、昼食を共にして、偶然に出会った人ながら、昨日の他人を少しも意識させない旅、楽しい身延山参りが出来た事は、最高の喜びであった。

： 我が庭に 日蓮背負う さくら植え ：

◇

◇

◇

一言の挨拶が、一言話す勇気が、人の心を解きほぐし、人と人とを結びつけたのだと、70歳代後半の私を悟らせてくれていた。

善なる人ばかりでは無いかも知れない。でも自分を素直にさらけ出す事によって、人の善意をくみ取れる日々であることを、信ずる一日、一日でありたい。

： 「朋あり、遠方より来る、また楽しからずや。」 …… 孔子

目 覚 め

昭和13年（1938年）今から65年前の話である。

私は、左足を膝から下指先まで、すっぽりと石膏のギプスでまかれて松葉杖にすぎり、東京日赤病院に向かって歩いていった。

◇

◇

◇

昭和12年（1937年）に義務教育の小学校を卒業した私は、その時5年就学の旧制中学の2年生になっていた。

中学入学の年、7月7日に始まった蘆溝橋事件を初めとして、国家総動員法発令等により、国を挙げて富国強兵が叫ばれだし、又ドイツからヒットラーユウゲントの若き青年等が来日し、東京は歓迎の提灯行列で沸き、私も宿舎である東京日比谷の帝国ホテル前まで、ヒットラーユウゲント歓迎の歌（ようこそ、はるばる西なる盟邦……）を歌いながら提灯行列の行進をしていた。

その頃国内の日本人は、中国大陸で戦う兵隊を思い、街頭では千人針、学校でも慰問袋の作成等老いも若きも総力を挙げて、協力する態勢が組まれていた。我々の学校にも徴兵された兵隊が泊まり、校庭で基礎的な訓練が施され、或る

時など、連帯責任で一列に並ばされた兵隊が、古参兵にピントを浴びている風景等が、我々の目の前で展開されていた。

そして次代の戦力となる中学生の私たちにも、各人の体力を表示する国民体力手帳が渡される制度が施行されたのである。走り幅跳び、走りの早さ、懸垂、重い俵を担いでのタイム測定、等々体力テストが学校で開催されたのである。

私も勿論テストを受けたのであるが、俵担ぎのタイム測定で左足首を捻挫してしまったのである。接骨院で診てもらいマッサージを一週間受けたのであるが、痛みが取れず腫れがますます増してきて良くならないので、白衣の傷病兵が大勢入院している近くの日赤病院で診察を受けると、足関節結核の疑いがあると、様子を診るために一カ月のギブス巻をさせられ、自宅療養が始まったが、その一カ月の長かった事、私の一生の中でも最も待ちどろしい時であった。一カ月後のレントゲン結果では、医師の予想通り足の骨の結核であった。『直るには、ギブスで左足の膝下から指先まで固定して、最低で3年は掛かるだろう。それが否なら手術して、悪い所をとれば体もずっと丈夫になるよ。』小学校の友達の父親である整形外科の部長である医師は、手術を進める口ぶりであ

る。

考えても見なかった3年間の療養、せっかく入学して楽しさが増した学校生活、でも軍隊と同じような上下関係で、3年経てば下級生の下になってしまいう屈辱手術で直るならばと、手術の様子を伺うとそれは、足首より上で切断する事であった。膝下が長く残せるので、義足でもほとんど障害がない生活が出来るとの事であった。

結核に対する特效薬もない時代で、肺結核・腸結核・喉頭結核等で若者がどんどん死亡している現状、3年で完治するとは誰も保証してくれない時代である。でも私は足の切断に対する手術に応ずる勇氣は出せなかった。

膝下を重いギプスで巻かれた左足、痒くても搔けない辛さ、その内に骨が犯されて膿となり、皮膚を破ってギプスの中に流れ出て、今度はその部分のギプスに穴を開け、毎日の包帯交換に通院の運びとなる。幸い日赤病院までは松葉杖でも15分位の距離である。薬と言っても月に1、2回のカルシウム注射位である。見た目では刻々と病状は悪くなる一方に思えて、病院の屋上のフェンスが無かったら、飛び降りたい衝動に駆られていた毎日であった。

カタコト・カタコトと後ろの方から靴音を鳴らしながら誰かが駆け出してくる。しかもあの高い音はそのころは未だ珍しかったハイヒールの音である。でも私には関係の無い事だからと、面脇を松葉杖に託しながら、3本足の私は病院を目指していた。ピタッと足音の鳴り止んだのは、歩いている私の脇であった。何事と顔を合わせると見覚えの無い40代位のご婦人であった。『その左足の包帯はどうなさったのですか。随分重そうですね。随分重いですか？』と親しげに聞いてくれていた。

「はい。これこれしかじかです。」と、今までの経過を見ず知らずの人であったが話をすると、

『良かった。私の良く知ってる人が貴方と同じ様な病気になり、でも、4年位ギブス療法で直ったので、向こうからお見受けした所、同じ病気では無いかと思ひ、そのお話しをして、元気に療養して戴きたく、駆け出して来たのです。』と病院の方向に共に歩きながら、私の傍らで話しながら慰めてくれていた。

…その方は名も告げず、再び会うことの無い人であった。…

男子学校であつたが、友達も良く見舞いに足を運んでくれていた。でも、見ず知らずの人から、ハイヒールで駆け足で来て慰めの言葉を貰うとは、私にとって大きな驚きであつた。

「今まで自分一人の事ばかり考えて喜び悩み、他の人の事を　少しでも考えた事があつたのか」と、

我が身を振り返り、見ず知らずのご婦人からかけられた行為は、私の全身に水を掛けられた様な、驚きの出来事であつた。

病氣療養中に父親が買ってくれた本の中に、

「病氣はその人に取って大きなマイナスで有るかも知れない。でも、病氣を通じて何かを心の中に留める事ができれば、病氣すら、その人に取って大きなプラスになり得るのだ。」と言う意味の言葉を見いだした事があるが、「自分と言う小さな殻の中から脱却して、他の人を知る。」と言う、私としては大きな目覚めを得た時であつた。

昭和15年（1940年）皇居の前で行われた紀元2600年の祝賀行事も、東京の真ん中に居ながらラジオを聞くだけで終わったが、私にはもっと意味の

ある年であったと思う。

若き日の闘病3年余りと言う歲月、多少後遺症の残った左足、考え様によつては、大きなマイナスであったかも知れない。

でもその中で得た本当の愛の姿、そして自分だけの世界から、他と共に生き励まされて居ると言う、真実の愛の世界に目覚めさせてくれたことは、私にとつてマイナスを補つて余りある、掛け替えのない、大きなプラスの出来事であつた。

若き日の心の目覚め、

65年たった今も、輝きを増し続けている。

2003年8月28日

歩み

城 所 進

今日も生きている 限りある人生

悩みも苦しみも そして喜びも私に襲いかかる

でも 一瞬の与えられた喜び

自分が他人から愛ヒトされている喜び

自分も他人を愛せる喜び

人生の中の幸せって

こんなものであるかも知れない。

他人が私を愛してくれた様に

自分がどれだけ他人を愛しただろうか

他人の愛の中に 私は本当の愛を知った

長い人生の中に 一瞬の出来事の中に

私は幸せを与えられていた

私は歩み続ける 弱い弱い歩みであっても

あの受けた幸せを 私はまだ返してはいない

今日一日の歩みの中に 心として言葉として

少しでも返せる 私の一日でありたい。

80歳代の悟り

「おいおい、そんなに亀をいじめては可哀想ではないか」

「おじさん、亀の尻尾をもって持ち上げると、足をバタバタやって面白いよ」

「そんなにいじめては可哀想だよ。おじさんが買ってやるから亀をおよこし」

と子供にいじめられている亀を、お金をやって助けてやって、海に逃がして

やった浦島太郎に、しばらくしてその亀が現れ、恩返しにと竜宮城に連れて行っ

て貰った太郎。奇麗な乙姫様に会い、御馳走や歌に踊の歓迎で、月日の経つの

も忘れ3年経ってしまった。

ある日ふと故郷を思い出し、亀に送られて元の浜に戻ってみると、300年

の歳月が経っていた。

辺りは前と全然異なり、知っていた人もおらず、寂しさのあまり乙姫様から、開けない様に言われて戴いた玉手箱を開けてみると、白い煙りが立ち昇り、浦島太郎はたちまち白髪のおじいさんになってしまった。これは私がまだ子供の頃、日本の童話の一つとして『浦島太郎』と言う話があって、母に聞かされ

た事を臆げながらも覚えてゐる筋である。動物報恩、神界行き説話の日本的表現として『万葉集』にも「浦島の子の話」として、昔から伝えられている伝承童話である。

その他、『花咲かしじい』『桃太郎』『こぶ取りじいさん』等、我々には忘れ難い童話として、記憶の隅に残っている。

『今年は私達も数え年で80歳の太台に乗り、「老いる」と言う事が、人生最大の課題と考える様になつて来ました。』：

と言う見出しで、今年も小学校同窓会の案内状が来た。昨年は私も65年ぶりに出席した青南12会の集まりである。私は終戦間際に東京を離れて一人静岡の地に来た為に、昨年まで物故者ならぬ行方不明者の一員として載っていたが、ひよんな事から私の消息が分かり、『今年もクラス会として30回目を銀座で開く』との招待状を戴いたのである。

昨年に続き出席すると、前年より1名少ない出席人数であり、しかも出席者14名の内2名の者が、奥さんの付き添いで出席している。まさに「老いる」を考えざるを得ない状態なのかも知れない。

咲き誇っていた桜の花も散り、自分の年を思わせる招待状を戴き、老いた友の姿を見て、ふと浦島太郎が故郷を思い出した様に、私も前記の童話を思い出したのである。

私と同じ年配の方々の計報を時々耳にする時、浜に帰った浦島太郎の心境を、私も判りかけているのである。戦中戦後のあの苦しい時代を共に生きて来た仲間である。比較的呑気な私でもセンチメンタリズムになるのである。若い時には思っても見なかった寂しさ。話相手が、一人ずつ欠けて行く寂しさの实感を、感ずる歳となったのである。

私もあの乙姫様から戴いた禁断の玉手箱を、開けてみたい心境になるのである。

12時間歩き続け足が棒になった天城連峰の縦断、バスの温度計を見ながら氷点下の全面結氷を願った、精進湖でのアイススケートツアー、夢にまで見た自分の車でのドライブ旅行。：

年よ戻れよと、玉手箱を開けて、若き日の夢よ再びの想いである。

でも一方私は、自分が戸籍に記された年齢になったと言う、自覚はないので

ある。山にも登りたい、ボーリングもしてみたい、若い人と意見を戦わしたい、頭が白くなっても、老人健康保険証を貰っても、まだまだ気持ちちは50歳台と思っている。(そう言っても医療費は老人並で支払っている。)私を置いて行った亀さんをもう一度探して、竜宮城に戻してもらい、若い人たちとスケアーダンス位は、踊ってみたいものと思っている。

最近性同一性症候群とかで、戸籍上も男が女に、女が男に変えて貰える法律が出来たと聞いている。それだったら戸籍年齢を身体状況に応じて、若く変えられるものなら変えて欲しいものである。インフレの貨幣単位も、デノミネーションで一挙に切り下げられる訳だから、年齢を切り下げても不合理では無い様に思えて来た。これは私だけの突飛な願望であり、老いた者の夢なのであるのか？

不老不死の薬を人類は昔から求め続けている。でも未だ見つかったと言う情報は一つも入って来ない。ノーベル賞を貰った偉い学者さんも、将来その様なものが出来るとは、一言もおっしゃってはいない。

なぜDNAの存在すら知らなかった大昔の時代から、神様は人間にだけ「死が必然である」と知らしめたのであろうか？死後の準備をさせる為に知らしめ

たのであろうか。動物の様に死を知らぬ生活の方が、呑氣で良かったのではな
かろうか？

人間の眼の網膜には、凸レンズである水晶帯を通して、眼の前の物体が逆さ
まに写っている訳である。それを人間の意識で正常に戻して生活している。其
の証拠に日本3景の一つである天の橋立を、股のぞきで覗いて見ても、借金取
りが来ると言って、逆立ちをして回りを眺めて見ても、上は上である。まさに
意識は天上天下を司る優れものである。

一個の肉体が滅びる死と言うものを、それを恐れおののか、寛容して受け
入れて行くか、我々の意識にかかっており、「老いる」を取り上げた同窓会の
諸君と、じっくりと考えて行きたいものである。

植物は花を咲かせ実を結び種を作り、そして本体は枯れても、また土から新
しい生命として生まれて行くのである。

DNAと言う遺伝子を通じて、肉体的にはちゃんと再生されて行くものでは
ある。考えて見れば、自然界は当の昔から肉体的不老不死の仕組みを、ちゃんと
備えてくれているのである。それでなければ、生命の歴史40億年の昔から今

日まで、我々人間は存在出来ないものであると感じている。ものを考える脳みそも、見る眼、聞く耳、しゃべる口、そして手足もちゃんと整えられて、受け継ぎ与えられているのである。

そして受け継ぐ智識は、物質文明の上に、又本等を通じ、各種機器を通じて現在の我々以上に、解明され発達させられて行くものと信じている。

ただ私が死なせたくないもの、滅ぼしたくないもの、DNAで伝えられないものとして心配なのが、人の心であり、愛の心である。

最近政府が教育基本法として、君が代を歌わせ、国旗掲揚を義務づけ、さらには基本法を改正して、国を愛する教育を高揚しようとしている事である。我々の世代の若い頃は、徹底した愛国心を教育されて来た。

肉体的な死をも恐れない愛国心であった。

それが人類に幸せをもたらしたとは、到底思えないのである。

我々の若い時代は、友を死の戦場に送り、愛する夫を、子供を、死に追いやったのである。相手を殺すか、自分が死ぬかの争いである。

人間が作った武器で弾薬で、果ては非武装の市民も差別なく焼き殺し、『国家の為に』と言う、たった一つのスローガンの為に、死人の山を築いたのである。

人間が作った武器で弾薬で、果ては非武装の市民も差別なく焼き殺し、『国家の為に』と言う、たった一つのスローガンの為に、死人の山を築いたのである。私は、もつとグローバルに人類を愛し、他の生き物を愛する教育こそ、これから受け継ぐべきものではないかと思うのである。

この様に心の伝承は、親の力、社会の力、国家の力、果ては宗教の力などにより受け継がれ、変容して行く訳である。それで私は心の伝承は、国連等全世界の人類が一つになって、人が人を愛し、他を愛すると言う心を、すべての人に教育し、伝承すべき義務があると思っている。

21世紀になっても、人間は戦争と言う名の元に、銃を使い、爆弾を使い、人が人を殺す事を正当化し、下等動物以下の姿を呈している。

戦争に明け暮れた20世紀が終わる時に、我々は平和な21世紀を夢見ていた。ところが今世紀が始まった途端に、戦争である。傷ついた子供の映像を見る度に、国のエゴ、人のエゴの為に、どれだけ多くの人達が苦しんでいるかを思わざるを得ない。

浦島太郎として、とても竜宮城で、のほほんと遊んでいられる時ではない。

いくら亀さんがリターンして来てくれても、とても乗って行ける心境ではなくなつた。

戻つて来た此の涙が、以前にも増して汚い涙だとしても、そしてあの美しい乙姫様が居ないとしても、神様が示された本当の愛の心の種を、撒き続けて行かなければならない心境に駆られて来た。

乙姫様から戴いた禁断の玉手箱を開けたら、300年とは言わないが、30歳齡を取った戸籍年齡相応の気持ちに成るのではないかと恐れている。腰は曲がり始めていても、白髪は染めないにしても、気持ちは玉手箱を開ける前の気持ちで、当分いたいからだ。私は伝承童話の浦島太郎が、寂しさのあまり玉手箱を開けた二の舞は踏みたくないからだ。美しい乙姫様の言われた事を確りと守り、私はやっぱり、まだ玉手箱を開ける訳にはいかない事を悟つた。

再生した若い遺伝子を持つ人達に、私の心にある2重ラセンのDNAを、少しでも多く、少しでも正確に、伝えて行く義務がある様に思えて来たからだ。

伝え終わつたと思つたら、病室のベッドの上に居ても、心静かに乙姫様を思い出しながら、ゆっくりと玉手箱を開けてみよう。：

枯れ葉

城 所 進

小さな芽吹き 出来たとき お前がこの世に誕生だ
緑の綺麗な餅肌で しっかり枝に捕まって

太陽一杯吸い込んで 緑の森になったんだ
雨が激しい深夜にも 嵐の風が吹くときも

お前はじっと耐えぬいて 優しい光り待っていた

緑の葉っぱを繰り広げ 光合成繰り返し

お前の務めをやり遂げて 立派な葉っぱになったのだ

木枯らし吹く世よに 季節が移り

緑の色も色あせて お前の務めが終わるとき

風に任せて一人降り 重なりあつて地の上で

土の温もり感じつつ 仲間と話ししてるかい

宇宙の遙かな時の中 お前の一生思うとき

塵芥ではないよな 枯れ葉っぱ

お前の立派な一生だ 私はお前が大好きだ

二〇〇三年十一月二十八日

病みし姉を覚えて

我が顔も定に覚えぬ 病みし姉

細き指にて 温もり伝う

言の葉も 忘れ病みたる細き手を

我が頬にあて 姉と交わる

枕辺に 痰吸引機置かれあり

病みし苦しみ 口に言えねど

細き手を 我が掌で重ね持ち

見舞う我が身の足りなさを悔ゆ

細やかな看取りの館 守られし

余生長らう 姉の幸せ

平成十四年五月末日 作

『夢』

註。

次ぎの文は、私が或る機会に眼の不自由な方を車でお送りした時に、町の様子を話ながら運転したら、とても興味を示され、健眼者が気が付かない事が多いことに気が付き、ICチップの発達した現在眼の不自由な方に利用したらどんなに良いかと思ひ立ち、作って見たものです。

インターネットで総理大臣官邸にIT推進本部が有るのを知り、送付して見ました。それから約2ヶ月した平成15年3月12日付け朝日新聞朝刊に『半導体に技術者の「夢」描け』と題して、山品正勝さんの書かれた記事が出て、(後述添付)私の提案した様な事は可能と出ていました。

政府かどこかの企業で眼の不自由な方の為に、一刻も早く実現出来る事を願う場かりです。

『此処は、銀座七丁目の13番地です。』

政雄の胸の携帯から、女性の美しいアナウンスが流れて来た。

もうすぐで、目指す銀座七丁目の18番地まであと5番地である。

胸がなん

となく、わくわくしだして来た。博子さんと会える。

政雄に取っては、2回目のデートである。高鳴る胸をどうする事もできず、一歩一歩携帯の異常信号を気にしながら、18番地目指して歩いて行く。胸の携帯から、『書店です。宝石店です。洋服店です。郵便局です。』と政雄が歩く路の傍らのお店が、音声となって政雄に知らせてくれていた。お店の入り口に付けられたチップと、胸の携帯とのやり取りが、銀座の街の風景を鮮明に教えてくれているのだった。

一人で歩く、東京の銀座の真ん中を、杖については居ると言え、一人で歩く。介添者無しに自由に歩く。目が不自由になった政雄に取って、心の世界に光りが射して、自由を取り戻した正に記念すべき日である。しかも先日デートで博子さんの優しさと、同病を共に克服し、その中から幸せを築いて行こうと言う思いを感じる事が出来て、待ちに待って居た2回目のデートの日を、今日迎えた喜びの時である。

先日のお見合いの席では、両方の両親並びに紹介者の方がおられて、何となく彼女との話もぎこちなく、お座なりに過ぎたのである。今日は日本で初めて、いや世界で初めての、東京都の勇断で作られたモデル地区としての、自動

誘導装置が設置されたこの銀座地区を、二人だけのプライベートの場所として、利用しようとして居るのである。

胸の携帯が何となくしゃべり出して居る。よく聞こえないのは、胸の高鳴りに音が負けて居るのかも知れない。

『銀座七丁目18番地です。』音声インプットされた目的地に着いた知らせである。

自宅を出てから、この自動誘導装置が設置してある銀座まで、妹が片腕を支えて来てくれた。

危ぶむ妹を、この地帯に入って帰ってもらったのである。

何時もの事ではあるが、兄弟姉妹に支えられた自分、でもこうして一人歩きが出来る様に、モデル地区を作ってくれた東京都の勇断にすがって自立して行く事が、政雄のこれからの人生目的であり、また同病の博子さんとの支え合う人生の出発点であると、妹の好意を感謝しつつ、一人で歩いて来たのである。

早速腕にはめた、電波音声時計の竜頭を押してみる。

『ただ今の時間は、10時50分です。』

と小さな声で告げてくれて居た。

約束の11時に10分前である。

「博子さん」と小声で呼んで見るが、応答が無い。まだ約束の時間より早い事ではあり、到着しては居ない様である。早速カバンの音声入力携帯電話に彼女の携帯電話番号を、回りを多少気にしながらも音声入力すると、彼女の晴れやかな弾みのある声が響いて来た。「政雄さん！今日は。今日はこんなに良いお天気に、政雄さんと会えるなんて幸せだわ。今ね、銀座七丁目の14番地を歩いて居るの。政雄さんは今何処？ えっ、もう18番地に着いたの！私がちょっと遅かったのかなあ！もう約束の11時になりました？」

「いやいや、博子さん、まだ10分前ですよ。私が少し早めに着いたので、あと少しですから、ゆっくり歩いて来てください。私は此処で待つて居ますから。携帯は切らずにありますから、到着したら教えてください。」

政雄の胸の高鳴りは、一段と高くなって行くのを、自分自身どうしようも無かった。女性と二人きりの生まれて初めてのデートである。

目が不自由である。危ないと言う理由でほとんど一人歩きはして無いのである。一人で自由に将来を共にする女性と心おきなく、歩き、話が出来る。正に人として解放されたこの喜びを目の前にして、ますます胸の高まりは増して

くるのであった。

「あつ、政雄さん18番地に着きました。いらっしゃる。」

「やあ、博子さんこっち、こっち」

政雄は、生まれて初めて、デートの目的地まで一人で歩き、未来のフィアンセと水入らずに話が出来るのである。人に手を取られて歩くのは、簡単で安全である。でも、自分のプライベートを犯されず、自由に行動が出来、愛する人と心おきなく話が出来る幸せを求めて、今日の日を心待ちにして居たのである。

IT機器が発達した今日、路上に設置された道路案内用のICチップ等の力を借りて、胸に納めた多機能携帯とのやり取りで、こうして天下の銀座七丁目まできて、目的を達し様として居るのである。21世紀の科学の発達した時

代、遠隔地にいながら自宅の風呂を沸かせるようになり、又自宅に居ながら自動車のエンジンをかけ、暖房を利かせられる世の中、そして犬の泣き声を聞いて、言葉に翻訳出来る携帯が現れた世の中でありながら、目の不自由な者に対する手助けが、先程のフクシヨンで無ければ書けない現状は、あまりにも情けない福祉国家である。

現在目の不自由な人の為に、危険地帯にや々と作られ出した路面上の凹凸に

よる誘導手段が唯一の施策とは、あまりにも貧弱であり、科学の發達の恩恵を得られて無いと言わざるを得ない。

フクシヨンのモデル地区に現した試みが成功したら、目の不自由な方達にとつて大きな福音となり、福祉日本と世界に誇れる画期的な企画であらうと思わざるを得ない。

凹凸を追う神経のいらだち、どの方向を向いて歩いているのかさえ知ることの出来ない不安、到達現在地点が何処かも知り得ないのである。目の不自由と言うことは、他の疾患の病氣と比べて、その生活の不自由さにおいて、隔世の感があるのである。

さてさて、先程のデートの二人であるが、路上のデートでは話もムードも出て来ないのである。かねて教わっていた銀座七丁目18番地にある、喫茶店「夢」に入りたいのである。早速多機能携帯ナビ竜頭を押して、銀座七丁目「夢」を音声入力すると、『18番地からマイナスに約12メートル』と、音声返答が帰って来た。

政雄は博子さんの手を確りと握りながら、携帯に路面のチップから発信されるメートル毎の路面信号を勘定しながら、「夢」に向かって歩いて行くので

ある。自分で自分の行く路を選んで、自分で歩いて行くのである。健常者では、当たり前何でもない事であるが、目の不自由な政雄に取っては、彷彿と沸いて来る喜びの一瞬であり、記念すべき時であった。

まさに21世紀も2桁を迎えた年になったら、目の不自由な者に取って、ICを利用したネットワークは、国の福祉政策に取り入れて、何としても成功させ、世界に誇る福祉国家の象徴と、ならしめる必要があるのではなからうか。

さて、政雄たちは喫茶店「夢」に入るべく、胸の多機能携帯器を回転させ、「夢」のICからハッスル電波を捕らえ、同調音の強くする方向へ歩んで行く。『「夢」に良くおいでくださいました。これより、上り階段が三段ありますのでお気をつけてお登りください。』とICから携帯へ案内音声流れて来た。

博子さんの手を確りと握りながら、一步一步階段を上って行く。杖で確認しながらもこの音声案内が、如何に不安を無くしてくれるものか、政雄は科学の発達が人の幸せに繋がるものである事を、これ程実感として感じた事は無かった。

店の入室信号が案内係に届いたのか、女性店員が「いらっしゃいませ」と声

をかけながら、博子さんの手を取ってテーブルまで案内してくれていた。

室内には、静かなクラシックの音楽が流れ、「お客様は4、5名ですから、ごゆっくり。後でメニューをお聞きますから、決まりましたらこのボタンを押してください。」と言って音声メニュー機器において案内嬢は去って行った。喫茶のメニューが小さい声で流れてきた。政雄も博子さんも、うっとりと音楽を聞きながら、運ばれて来た甘いコーヒーとケーキを、時を惜しむかの様にゆっくりと食べながら、静かな幸せな一時を過ごしていた。

……◇……◇……◇……

さて政雄は、銀座から博子さんに乗せてタクシーを走らせ、別れがたい思いを断つ意味で、彼女と堅い握手を交わして、博子さん宅に送った後、一人暮らしの我が家に戻って来た。

多機能携帯の小さな竜頭を押すと、ガチャンと玄関の扉が開き、何となくヒンヤリとした空気が流れて来た。先程までの高ぶった鼓動がまだ何となく心に残り、希望と勇氣に囲まれた体を廊下に運んでいた。足を一步一步進めるに従い、居間です・トイレです・台所です・と言う声が多機能携帯から流れてくる。政雄が張ったチップからの信号を、音声に変えてくれているのである。

今日のデートの喜びを、少しでも逃がしたくないと居間に入り、勝手知ったるベツトに、服も着替えずにごろんと横になり、喜びを胸の厚いベールに包みながら、電波音声時計の竜頭を押すと、『ただ今の時間は、午後8時30分です』と告げていた。

どれほど寝た事であろうか、トイレに目を覚まして多機能携帯を持ちながら廊下に出る。トイレを済ますと彼女と飲んだコーヒーの味を思いだし、携帯が教えてくれる台所に入る。

多機能携帯を水平に持ち、ゆっくりと体を一回転してみる。

『流しです・レンジです・冷蔵庫です・戸棚です・コーヒー沸かしです・ゴミ箱です・出口です』と政雄が張ったチップの付いている箇所から、携帯に政雄が音声入力したぶっきらぼうの、味気無い言葉が響いていた。

よし結婚したら、この声を彼女の優しい声に変えてやるぞ、とコーヒー沸かしと告げる方向に歩みながら、政雄の脳裏をかすめていた。

……◇……◇……◇……

以上健眼者として、目の不自由な方がどれほど苦勞されているか、どれほど、もっと自由に行動したいか、そしてプライバシーの確保を欲しておられる

か、まだまだ足りない想いながらもその一端を想像し、その解消に役立つ機器は出来ないものか、そしてそれを役立てる福祉政策が出来ないかと、電子技術の発達が著しい今日この頃、その想いを強くする者として、あえて作文し、実現の日の一日も早からん事を、心から切に願う者である。

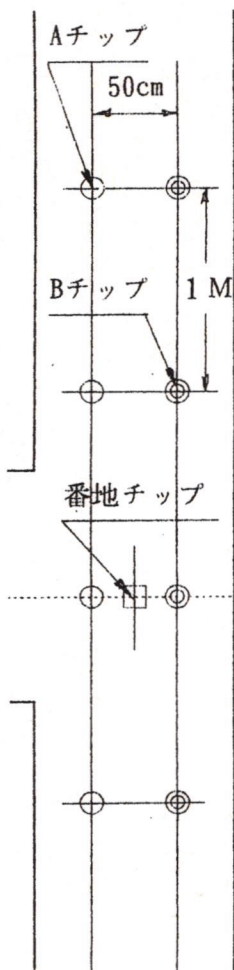
2002年の暮れの事だと覚えているが、テレビで図書館の図書の管理に、ICカードを使いだしているのを見せてくれたが、厚さ0.7mmデ名刺位の大きさの紙にICチップとアンテナ相当の線があり、それを本の裏表紙に張り付けて、貸し出し管理は記録機器の上に乗せるだけで、書籍名・著書名等が簡単に管理できる様になっており、そこを通さず持ち出すと、飛行機搭乗の時に通る金属探知機のように、音がして不法持ち出しを防ぐばかりか、書棚に並べてある書籍の中から、必要書籍を見つけたすのに、書棚に並べてある書籍の表に、ポータブルの検知器を通してやると、必要書籍の前で信号音がして、簡単に本を見つけたす事ができていた。

今のところ、そのICカードの値段は1枚100円であるとの事であり、量産になれば大幅にコストダウンが計れるものと思われる。以下実現機器の必要能力と前期作文から考えられる仕様を記して見たい。



前記モデル地区を利用する設置機器、並びに多機能携帯機器の仕様を、電子機器には全く疎い者であるが、アイデアの一端を書かせてもらおうと、以下の様になる。

1. 路面設置チップ。



この場合は、主として歩道の中央に右図の如く、幅50cm位の位置にA、Bの種類のチップを1mピッチでタイル状に埋め込み、曲がり角等に決められたポットの所では、前記文章に出てくる様な案内音声を発信さすチップを埋め込み、チップAとBは、到達範囲が1.5m位の短いものとし、かつA、Bが多少異なる静かな音声を発するものとする。

作用としては、携帯をもった歩行者が、番地チップ中央を正しく歩むと、左右のチップからの混成音が聞こえ、もし右に50cm以上ずれると、左のチップからの音が途絶え、歩行者が右にずれた事が解り、中央に戻る事が出来る。左にずれた場合もしかりである。

又チップが1mのピッチであるから、歩きながら発信音を数える事により、歩行距離を知ることが出来る。

また各商店入り口に店の紹介チップを張る事により、買い物を誘導することができる。

以上より解る様に路面設置チップは、社会で共用に利用するものであり、社会的規格を作り、共通に利用出来るものでなければならない。公のコンセンサスが必要のものである。したがってすぐに実施は難しい。

2, 室内チップについて。

室内チップは、室内の必要箇所に添付出来るものとし、各室内チップは少しずつ周波数の異なる周波数で多機能携帯と結ばれ、その周波数に併せて多機能携帯に入力した音声を発する様にしてある。したがって必要枚数の室内チップを用意して、確認を要する部分（トイレとかレンジとか）に張って、そのチッ

プの周波数に確認を要する部分の言葉を、多機能携帯に入力すればよい。

したがって室内チップはその人個人で幾らでも作り、個人で利用するものである。したがって、機器・チップ等の開発が出来れば、直ぐにでも利用出来る事と思う。 …(ワンチャンの鳴き声翻訳機すら出来ているのだもの)…

3、携帯多機能機器。

① 携帯出来る大きさとし、出来ればポケットに収められる大きさが望ましい。最近ではデジタルカメラもカード化されている。 ② 入力は、電源並び

に切り替え竜頭を除き、音声対応入力とし、上記路面設置チップとの通信機能と、竜頭切り替えにより、室内設置チップとの通信機能を有し、室内チップより発信する通信言語を入力発音出来るものとする。

③ 又カーナビの如く、通信衛星より発する位置検出により、到達入力位置までの案内アナウンスが望ましい。その場合、設置地名、番地等を基準にアナウンスされる事が必要である。

④ 又、歩行者が、どちらを向いて歩いているのかを知るために、竜頭切り替えにより、横たえた機器の方向が、東西南北の方向を地磁気又は衛星よりの通信入力より、音声発信される事が望ましい。表現は45度単位で良い

ご意見、「直言」への投稿(約千字)には住所・電話番号を明記してください。〒104-8011 朝日新聞社 科学医療部/ファクス 東京03-8542-8217 大阪06-6201-0249/eメール kagaku@ed.asahi.com

のではないか。

⑤ 又、竜頭切り替えにより、時間の音声発生機能があれば、特殊な時計は必要なく、より便利であろうと思われる。

分単位の表示で、音声発生出来れば良いのではないか。

以上、電子機器にあまり知識のない者が考えた事で、日進月歩の科学の世の中で、より良いものが廉価で出来れば、福祉に大いに貢献するものと思われる、実現の一日も早からん事を願うばかりである。



NECシリコンシステム研究所部長
やまおか まさはる
山品 正勝

直言

半導体に技術者の「夢」描け

リー主体のビジネスから、高度な機能を実現する「システムLSI」という高付加価値製品へと転換しつつある。

リー主体のビジネスから、数万台の携帯電話、高度な機能を実現する「システムLSI」と多岐のものがネット化されるユニタス時代には、半導体が多用される。好調な欧米や韓国の大手半導体メーカーのシェアは3割。7割は特色ある会社の独壇場だ。日本にも、映像処理の有用な絵を描くかにある。そんな技術者の夢を、実現に向けて邁進する実行力が欠かせない。自らの技術で豊かな社会を実現する、という夢を共有することが必要だ。

2月に開かれた半導体分野最大の国際学会「ISSCC」で、50周年記念の貢献賞を頂いた。

「久々の明るいニュース」と関係からも祝ってもらったが、手放しでは喜べない。

わずかな電力で毎秒数億回の処理をし、画像の圧縮・伸張、無線通信など多様な機能をもつ。おかげで、15年前に数百万円し、小型車ほどの大きさだったテレビ会議システムは、

途で世界の半分以上を占める会社がある。

その時代はこれから。今こそ技術者は本来の夢を取り戻し、新たな開発に着手してほしい。

同学会と並ぶVLSI

日本企業は現在、メモ

リ主体のビジネスから、数万台の携帯電話、高度な機能を実現する「システムLSI」という高付加価値製品へと転換しつつある。

好調な欧米や韓国の大手半導体メーカーのシェアは3割。7割は特色ある会社の独壇場だ。日本にも、映像処理の有用な絵を描くかにある。そんな技術者の夢を、実現に向けて邁進する実行力が欠かせない。自らの技術で豊かな社会を実現する、という夢を共有することが必要だ。

途で世界の半分以上を占める会社がある。

その時代はこれから。今こそ技術者は本来の夢を取り戻し、新たな開発に着手してほしい。

（筆者）高瀬・低消費電力システムLSIの研究論文を多数発表。

ミイラ捕り

私は別に確たる心情があるわけでは無いが、何となく流行を追う事は好きではない。

さて、もう55年程前の終戦後の古い話であるが、会社の連中と忘年会の帰り身延山に立ち寄った事があった。石段を登り詰めた久遠寺の境内はあまり人も居なかったが、私の眼に飛び込んで来たのは、黒のロングスカートをはいた婦人の姿だった。境内の緑の木々の中に、夕日を浴びて立っておられるすらっとした美しい姿に、私は驚きのまなこを隠し得なかった。

女の人が戦時中の銃剣術に、消火のバケツリレーに、欠くことが出来ぬモンペ姿しか心のまなこに残っていなかった私が、女性の美しさとして、突如として目の前に現れた驚き、しばし見とれて足の動けぬ私であった。今も強烈な印象として残っている。でもその後たちまち流行となって、街のあちこちで見られるようになり、ロングスカートを見ても私の心は何の反応も示さぬ様になっていた。

比較的新しく流行ったものとして、女子高生などで流行ったルーズソックス

と言うのか、白のだぶだぶの靴下があるが、私など大正生まれの頭から足先まで、血の巡りの悪くなった者にとって、足を締め付ける部分にメーカー名が有ったらくきりと赤く出るのではないかと思わせる様な靴下よりは、はるかに実用的では無いかと思っている。スタイリングだけで女子学生の間に流行したのかどうか、検証して見たいものである。

流行と言うかブームと言うのか、それは生まれて広がりそして無くなって行く、線香花火の様なものなのかも知れない。でも流行の先端は、刺激の少ない私にとって、何となく魅力に捕らわれるものであるのかも知れない。皆もその魅力に引かれて流行が起きる事なのであろう。

最近流行には目敏い、商売の変化を私は気付き始めた。それはペットショップの売り場の進出である。小さな専門商店から、大型のスーパーに客足がどんどん変化する中で、その大型スーパーにほとんどペットショップが出来た事である。食料専門売り場のスーパーは元より、百円スーパーやお菓屋さんまでも、ペット商品の売り場が結構の面積を占めて存在している事である。極端な例として、電球からトンカチ迄売っている老舗の日曜雑貨スーパーで、人間の食料は一切売って無いのに、犬、猫、の餌売り場はどんどん拡張して、自動車部品

売り場を圧迫している現状である。

私の知っている範囲でも、富士市に拾指を越えるペットショップを有する大型店があることである。需要がそれだけ有るから成り立つのであろう。何拾種類と言う犬猫の食料やら、薬、飼育道具、果ては犬の泣き声の翻訳機まで売っている。そして犬猫の飼育に関する多くの種類の単行本、月刊誌が、これまた本屋の棚を占領している。

又最近では全国版の一流新聞に2段抜き全幅で、愛犬洋服の作り方通信講座の広告が、時々見られる現象さえ現れている。

3月10日付朝日新聞に寄ると国内で飼われている犬、猫の数は各1千万匹で、『ほぼ2割の世帯が動物を飼育している』と報じている。そしてBSE対策として2千億円強、鳥インフルエンザ対策では自衛隊まで出動し、日本中を脅威に陥れた等、膨大な損失を未然に防ぐ手立てのない貧弱な現状の検査医療体制に対し、各都道府県毎に公立の動物病院を一施設以上設置する等、共通感染症対策の必要性を唱えていた。

まさに食を動物に頼る人間生活であり、又ペットブームの到来でもあり、動物を抜きにした人間社会はあり得ない現状を示していた。

私も10年程前まで、娘が拾って来た捨て犬を飼っていた。確かに可愛いものである。でも、可愛いければ可愛いだけに死に目に会うのは辛いものである。だから私は再び犬を飼う気にはならなかった。ましていくらブームとは言え、それに便乗する気等少しも無かった。

でも実は、昨年（平成15年）の6月始めの事であるが、台風6号の過ぎた時期に我が家に近い海岸線を久しぶりに散歩して見たら、松林の一角に5、6人の人が集まって何か眺めている。何とは無しに近付いて見ると、犬小屋のそばに1匹の小形犬が松の木に繋がれ、雨でびちょびちょになっている。しかも毛が伸び放題で、頭か尻尾か解らぬ汚れた小犬である。

それでも近所の人が、ドックフードやら牛乳を持って来て器一杯にして置いてある。そして犬小屋の中の台風で濡れた布団を出して、家からもって来た毛布に敷き変えてやってる伯母さんも居る。

捨て犬と言う哀れな動物に対する人々の愛情が其処にはたっぷり注がれて、私のハートを捕らえ、善意と哀れさを見せつけられていた。でも3日経っても飼う人が現れない様で、依然汚れたまま繋がれている犬である。私も以前飼っていた愛犬『友』の死を思いだし、もう犬は飼わないと心の中で決めてはいた

が、このままでは保健所行きであり、人間の都合で放置されあの濡れねずみの哀れな姿、そして自然死できぬ悲しみを味わせるのは、動物とは言え余りにも残酷と、飼って見る気持ちになっていた。

まず飼うには共同飼育者となる、大阪城の外堀に当たる奥方を陥落させねばならぬと、一緒に行ってみると「あの汚れでは」と尻込みである。ならばベツトシヨップでと車で連れて行くと、明日でなければ出来ぬとのこと、もう一度松林に連れ戻してみると犬小屋の屋根に『この犬は拾い主が決まりましたので、連れて行かないで下さい』と近所の人が大きく書いた紙を張ってあった。保健所行きを恐れ、犬の命を守る為に書かれた、愛情に満ちたものだった。

さて翌日見違える程さっぱりと奇麗になった捨て犬は、大きな眼玉が現れたので、奥方の命名した『チビ丸』と言う名前を貰い、6Kg程の体重で可愛い我が家の一員となったのである。

チビ丸の犬の種類を調べ様と図書館通いをすると、1964年にイギリスで開発された垂れ耳のノーフォーク・テリアの血筋を引く狹犬らしいと判明した。確かに散歩などで見知らぬ犬と会うと、はるかに小さな癖に猛烈に吠え向かって行くのである。そのくせ人間の子供などには、後ろ足で立って挨拶の真似を

する可愛らしきがあり、表情と共に好かれる犬となっていた。

朝の散歩に行く時に「ばあちゃんに散歩に行くと言ってきな」と言うところと挨拶に行ったり、子守歌を歌ってやると、軒をかいて寝る様など、まさに我が子と変わらぬ可愛さである。

最近テレビで放映されて、私も大変感動を与えられた『盲動犬クイール』の賢さ、そしてご主人の行動にじっと静かに耐えるあの忍耐力、唯々感じいるばかりであるが、攻撃力を売り物にするノーホーク・テリアの血を受けているチビ丸は、家にいるのが退屈なのか、私の「散歩に行くか」の一言で、丸い目が一段と生氣づいて輝き、後ろ足で立って身の丈以上に飛び上がり、喜びを現すのである。まさに喜びを隠し得ない正直な行動で、つつい眠い目を擦りながら、チビ丸に煽られて身支度を急ぎ日の出前の散歩に出掛けるのである。

そして散歩に行くのだと解ると、残してあったドックフードを、我武者羅に食べだすのである。『腹が減っては、戦が出来ぬ』と日本古来の諺をちゃんと実行しているのである。

一歩玄関を出ると、とたんにチビ丸が主人公になりすまして、縄張りをいち早く回る為に、私を引っ張って行くのである。自己主張が強い性格なのかも知

れない。這い松の幹に頭をぶつけるのではないかと恐れながら、引っ張られる私の恐怖心などはそっちのけで、まだ暗い堤防の夜道を速足で歩くのである。

さて縄張りを一回り回り終わり我が家に近づく頃になると、チビ丸の早さより私の足の早さが少し早くなるのである。家に帰って退屈するより尚散歩がしたいのだと思われる。その気持ちは解らない訳でもないが、お利口お利口とおせいじを言いながら、わが家への帰還である。

もう一つ顕著に解った事として、玄関に用があつて人が尋ねて来た時である。犬に関心の無い来訪者などが、チビ丸に話かける事なく帰りかけると、急に吠えるのである。正に自己の存在を無視した行為として、怒りを表すのである。よく通りすがりの時等に、私が挨拶しても、返答もしてくれない人に、心の中に密かな怒りを覚える私と違って、堂々と表現するのである。はばかり所無く心に素直な正当派なのかも知れない。

私はチビ丸と心を通わせる為に、なるべく話をしてやるのであるが、勿論通ずる事は少ないと思うが、8ヶ月近くも一緒に居ると、話の中の単語の意味がある程度解るのか、チビ丸の反応が顕著に現れる事が少しずつ出て来ている。

先づ先程書いた『散歩』と言う言葉の外に、『ねんね』と言う言葉である。

この言葉に自分が眠いときには、派手にすてんと横になる事である。そして子守歌を口ずさんでやると、目を細めてやがて寝入り、気持ちがいよいときには、すやすやと鼾をかきだすのである。この現象は私としてはチビ丸と心の通い合った証拠として喜んでいるだが、さて、チビ丸は何と想っている事であろうか？夜寝ているチビ丸の頭を撫でて声をかけてやると、私の手をペロペロと嘗めて一日の感謝を表現している。言葉の表現が出来ぬ動物であるが、心は確りと持っていて、出来る限りの動作で表している。

捨てられた恐怖の3日間に可愛がってくれた方達が見えると、ちゃんと覚えていて、立ち上がり抱きついて愛情の表現をするのである。ともかく生き物は人間の様に嘘をつかず正直で、こだわりをもたず飾らずに、恩を感じている可愛い生き物である。

犬を飼って見ると、やはり犬に関するものが好むと好まざるとを問わず、私の眼に写ってくるのである。前記のペット用品の売り場、新聞など、以前は気にも止めなかったものに、自然と足が向き眼が移るのである。

過日犬猫病院に登録に行った時、飼い主らしき人が獣医に送り物をしているのを見たが、飼って見ると犬猫などのペットも自分の子供の様に可愛いもの

で少しでも良く診て貰いたい為であろう？

我々の身近に起きたペットブーム、これは平和国家の証拠かも知れない。戦いに明けくれている多くの国々の人達が、ペットを飼える日が一日も早く到来する事を願うばかりである。

ペットブーム、核家族が増え年寄りが増える日本の現状では当分収まりそうも無い現象かも知れない。

チビ丸との心の交流が私を捕らえ、私の小さな主義主張等関係なく、ブームに乗った様な結果になってしまっていた。

ブームと言う現象に、心の中では反感があった私であり、「ブームに乗ってチビ丸を飼ったのではない無い」と自分に言い聞かせているが、ここまで書いてみて、『ミイラ捕りがミイラになった』と言う言葉を思い出してしまった。

私も普通の弱い人間であった。

あなたがどんな立場にいても、
いつでも親切な人であることは可能
それは、人として自然なあり方なの

*No matter what position you are put
it is possible to always be kind.
That is a natural act as a human.*

後書き

文章を書く、それは自分以外の人に読んで戴きたいから書くのだと思います。読んで戴くには、少なくとも退屈しないで、活字を拾えるものでなければならぬと思います。その為にはストーリーの面白さ、文章表現のうまさ、簡潔さ、等々なかなか私には及ばない事ばかりです。

その意味もあってか最近では、エッセイにもフィクションを多少入れて面白さ、表現の巧みさを補う風習が広がっているが、この本の本題『我が心の豎琴』と題している以上、フィクションを入れる事は題名に反する事であるし、自分の心を感じたことを素直に書いたものを、集めたつもりであります。

今回も前回まとめたものと同様、前編の喜寿編を出した以降、その時その時に感じた事を書いたものを編集しただけです。読み返せば表現を書き直す方が良いと思われる所も多々ありますが、その時点で感じた表現をそのまま残す事が、その時心が感じた豎琴を飾り気なく、素直に表現するものではないかと感じて、そのまま編集してみました。私の文章表現のまづさに拘わらず、ここまで読んで戴けたことは、望外の喜びであり、感謝致します。

80の歳を迎えて改めて感ずる事は、人生の指針を諭してくれた父。東京の家を戦災で焼かれ、戦後の混乱期に家族を守る為に、心血を注いで55歳でなくなった父。病弱だった私の為に東大病院のベッドの下に1ヶ月余り寝泊まりして看病してくれた母。50年近く支えあっている家内。見ず知らず方々が示された愛。数知れぬ神の守りの上に、今の私がいるのだと言う事を、改めて教えられ諭される者です。後何年心の竖琴を鳴らせられるのか、神のみが知る事です、ボケない限り書き続けて行きたいものだと思っています。

尚文章空欄の英語入り横書きの文章は、『花の言葉集』より転載しました。大変私的な事まで立ち入った、後書きになってしまいましたが、編集し終わった時の感想を素直に表わしたものとして、お許しをお願い致します。

平成16年5月16日 (満80歳の日に)

静岡県富士市鈴川中町21・6

城所進

